安 養 寺 Ⅱ・Ⅲ 遺 跡

－水垂地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

1996年3月

掛川市教育委員会

安　養　寺 II・III 遺　跡

－水垂地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

序

歴史の歩みを川にたとえると、私たちの時代は、大河のように豊かな流れとなって海に注ぎ出る河口の辺りといえよう。しかし、いかなる大河もその根元をたどっていくと、流域は徐々に狭まり、途中大小の川が合していることがわかる。さらにさかのぼると、山合いを流れる清冽な奔流となり、また、細々とした谷水となり、その先は山中に消える。

川の上流に思いをはせるとき、河口近い大河の中にいる私たちはこの水がどこから来たものであるかどうかその始源をたずねる旅に出かけたくなる。

昔からの人々の生活の歩みはとだえることなく、時には蛇行し、岸辺を洗い、岩にぶつかりながら、その流れは変化に富んできた。その流れをひとすくい汲むと、雄大な生命の継続を感じる。

先人の遺した文化財はいわば、その時代の流れを今に伝える私たちへのメッセージであり、また貴重な財産でもある。文化財はひとたび破壊されると、その損失ははかり知れなく、文化財そのものは無力で、なすがままにされる弱い存在でしかない。文化財の生命は私たちの掌中に載せられているのである。

掛川市内では現在遺跡として知られているものは933箇所もあり、静岡県内でも遺跡数が最も多いとされいる。私たちの生活をより便利にするため、やむなく遺跡を消滅せざるを得ないとき、記録保存というかたちで、その遺跡を後世に伝えているのが現状である。

このたび水垂地区の土地改良事業により、安養寺Ⅱ遺跡の発掘調査を行った。静岡県教育委員会の指導により、掛川市教育委員会の管理のもと静岡人類史研究所により発掘調査を実施した。発掘調査は綿密な準備と計画により、的確に実施することができた。発掘調査結果は本文に詳述されているが、この地域の上古の遺構の一端が解明できたことは、現在掛川市教育委員会で市史上巻（古代・中世）の編纂事業が進められている中、貴重な資料となった。

最後に、ご指導いただいた静岡県教育委員会や発掘調査を担当した静岡人類史研究所の労苦に謝するとともに、今回の調査にあたりご理解ご協力いただいた水垂土地改良区、小笠山麓開発株式会社はじめ地元関係者の方々に厚くお礼を申し上げる。

平成8年3月吉日

掛川市教育委員会
教育長　小松弥生

例　言

1．本報告書は、静岡県掛川市水垂および、安養寺地内に計画された水垂地区土地改良事業計画地内に所在する安養寺Ⅱ遺跡および安養寺Ⅲ遺跡の発掘調査報告書である。

2．安養寺Ⅱ遺跡の発掘調査は、水垂土地改良区の委託を受け、掛川市教育委員会が調査主体者となり、静岡人類史研究所が調査を担当した。

安養寺Ⅲ遺跡の発掘調査は、掛川市教育委員会が行った。

3．安養寺Ⅱ遺跡の発掘調査については、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに「安養寺Ⅱ遺跡発掘調査連絡会」を設置し、発掘調査の方法・日程等について協議を行いながら調査を進めた。

「安養寺Ⅱ遺跡発掘調査連絡会」の構成は、以下のとおりである。

調査主体者	掛川市教育委員会	教育長	小松弥生
調査事務局	掛川市教育委員会社会教育課	課　長	清水 功
		文化係長	澤村久雄
		主　任	松本一男
調査担当者	静岡人類史研究所	所　長	森 威史
		学芸員	小谷亮二
調査指導	静岡県教育委員会文化課	課長	鈴木吉勝
		指導主事	篠原修二
開発事業者	水垂土地改良区	理事長	岡田行雄

4．安養寺Ⅱ遺跡の現地調査は平成７年８月21日から平成７年10月14日まで、安養寺Ⅲ遺跡の現地調査は平成７年５月16日から６月６日まで実施した。また、出土遺物の整理と報告書の作成は現地調査終了後の平成７年10月16日から平成８年３月31日まで実施した。

5.遺物の実測およびトレースは田中久美子(静岡人類史研究所学芸員)が中心となって行った。また、遺物の撮影は小谷・武田が行い、空中写真撮影は株式会社東日に委託した。

6．本報告書の執筆は、Ⅰ－１、Ⅰ－２の安養寺Ⅲ遺跡の部分、Ⅲ－１については松本が、それ以外を小谷がそれぞれ担当し、編集を小谷・田中が行った。

7.「付載 安養寺Ⅱ遺跡の自然科学分析」は株式会社古環境研究所による分析の結果である。

8.発掘調査および遺物の整理においては次の方々に御指導と御助言を賜った。感謝の意を表したい。(順不同、敬称略)

向坂鋼二　池谷初恵　システム提案　松井一晃

9.本調査における図面・写真・遺物はすべて掛川市教育委員会で保管している。

10．現地調査における参加者は次のとおりである。

岡田行雄、原田守、鈴木敬、加藤隆造、松本きよ、岡田淑子、杉森和子、
加藤悦子、小関すみゑ、石川とみ、岡本鶴子、中村すま子、松浦せい子、
長谷川幸子

11. 本書における遺構・遺物の表示は以下の通りである。

①遺構挿図の縮尺

各図にバースケールで表示してある。

②遺構挿図の方位

特に示さない限り図の上が北（磁北）を示す。

③遺物挿図の縮尺

各図にバースケールで表示してある。

④写真図版の縮尺

遺構・遺物の縮尺は任意である。

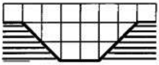
⑤水糸レベルの数字は海抜高を示し、単位はメートル(m)である。

⑥スクリントーン

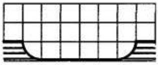
撹乱部分

⑦遺構の断面状況（長径または長軸に対する断面）の表現は下の図に基づくものである。

上に広く開くU字形



皿 状



目 次

序

例言
Ⅰ　発掘調査と遺跡の概要
　1．調査に至る経緯と調査の目的 …… 1
　2．遺跡をめぐる環境
　　（1）地理的環境 …… 2
　　（2）歴史的環境 …… 4
　3．調査の方法と経過 …… 6
Ⅱ　安養寺Ⅱ遺跡の調査
　1．層序 …… 9
　2．遺構
　　（1）土坑 …… 10
　　（2）焼土跡 …… 12
　3．遺物
　　（1）石器 …… 15
　　（2）土器 …… 24
　　（3）遺物観察表 …… 34
　4．まとめ …… 38
参考文献 …… 39
Ⅲ　安養寺Ⅲ遺跡の調査
　1．遺構
　　（1）住居跡 …… 40
　　（2）土壙 …… 43
　2．遺物
　　（1）土器 …… 44
　　（2）鉄製品 …… 44
　　（3）遺物観察表 …… 44
　3．まとめ …… 46
付載　安養寺Ⅱ遺跡の自然科学分析 …… 47
写真図版

挿図目次

第1図　安養寺Ⅱ・Ⅲ遺跡位置図 2
第2図　安養寺Ⅱ・Ⅲ遺跡周辺の地形区分図 3
第3図　安養寺Ⅱ・Ⅲ遺跡周辺の遺跡分布図 4
第4図　安養寺Ⅱ遺跡の調査対象区域とグリッド設定図 6
第5図　安養寺Ⅲ遺跡の調査対象区域とグリッド設定図 8
第6図　安養寺Ⅱ遺跡の層序 9
第7図　安養寺Ⅱ遺跡の遺構全体図 10
第8図　第1号土坑の平・断面図 11
第9図　第2号土坑の平・断面図 11
第10図　第3号土坑の平・断面図 12
第11図　第1号焼土跡の平・断面図 12
第12図　第2号焼土跡の平・断面図 13
第13図　第3号焼土跡の平・断面図 14
第14図　第4号焼土跡の平・断面図 14
第15図　第4号焼土跡周辺の土器と炭化物の出土状況 14
第16図　石器分布図 15
第17図　石器類の出土分布図（平・断面図） 16
第18図　石器実測図（1） 17
第19図　石器実測図（2） 19
第20図　石器実測図（3） 22
第21図　石器実測図（4） 23
第22図　土器出土分布図（平・断面図） 24
第23図　縄文土器・弥生土器実測図 25
第24図　灰釉陶器の実測図（1） 25
第25図　灰釉陶器の実測図（2） 28
第26図　須恵器の実測図 32
第27図　土師質土器の実測図 32
第28図　安養寺Ⅲ遺跡全体図 40
第29図　第1号住居跡（SB01）平・断面図 41
第30図　第2号住居跡（SB02）平・断面図 42
第31図　土壙（SF01）平面図 43
第32図　土壙（SF01）状況図 43
第33図　安養寺Ⅲ遺跡から出土した土器の実測図 45
第34図　安養寺Ⅲ遺跡から出土した鉄製品の実測図 45

写真図版目次

1. 安養寺Ⅱ遺跡
1. 空中写真 …… 1
2. 東側壁面層序 …… 2
3. 西側壁面層序 …… 2
4. 第1号土坑 …… 3
5. 第1号土坑の遺物出土状況（南から） …… 3
6. 第3号土坑（北から） …… 3
7. 第4号焼土跡（南東から） …… 3
8. 遺物出土状況（図No.65） …… 4
9. 調査終了時（西から） …… 4
10. 調査終了時（東から） …… 4
11. 安養寺Ⅱ遺跡から出土した石器（1） …… 5
12. 安養寺Ⅱ遺跡から出土した石器（2） …… 6
13. 安養寺Ⅱ遺跡から出土した土器（1） …… 7
14. 安養寺Ⅱ遺跡から出土した土器（2） …… 7
15. 安養寺Ⅱ遺跡から出土した土器（3） …… 8
2. 安養寺Ⅲ遺跡
1. 安養寺Ⅲ遺跡完掘状況（東から） …… 9
2. ＳＢ０１、ＳＦ０１完掘状況（西から） …… 9
3. ＳＢ０１、ＳＦ０１遺物出土状況（東から） …… 10
4. ＳＢ０１遺物出土状況 …… 10
5. ＳＦ０１遺物出土状況 …… 11
6. ＳＢ０２完掘状況（南から） …… 11
7. 安養寺Ⅲ遺跡から出土した遺物 …… 12

Ⅰ　発掘調査と遺跡の概要

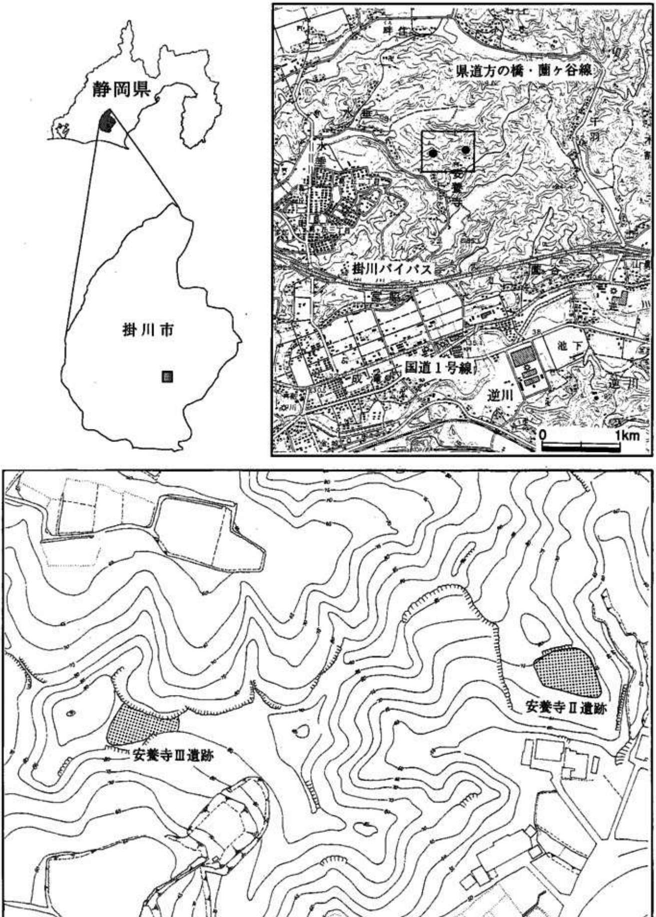
1．調査に至る経緯と調査の目的

本遺跡群の所在する掛川市安養寺は、市街地から北東方向に直線距離でおよそ３km、車で10分ほどの所に位置する。この安養寺は旧西山口村の西端に位置し、西側に所在する旧粟本村水垂との村境にあたる。周辺は山間地で平坦な地形はほとんどなく、遺跡数の少ない地区である。

今回の発掘調査は、西側の水垂地区を中心に安養寺地区を含めた範囲で実施する土地改良事業に伴い行われたものである。計画は組合施工による「水垂土地改良事業」として水垂土地改良区が起こした事業で、開発面積約30ha、工事期間平成６年３月から平成８年３月を予定としたものである。

事業代行機関の小笠山麓開発株式会社から「埋蔵文化財の所在の有無およびその取り扱いについて」の照会があったのは、平成５年５月のことである。掛川市教育委員会では計画地内の遺跡所在状況について現地踏査を行い、地形的に観て遺跡が所在しそうな地点をも含め「計画地内には、７箇所に遺跡が所在する」ことを回答した（平成６年１月）。こうして水垂土地改良事業における埋蔵文化財取り扱いの協議が始まり、平成７年３月に提出された「埋蔵文化財所在確認調査依頼書」に基づき、遺跡所在状況の確認調査を実施した。これにより遺跡所在状況が明らかとなり、その結果安養寺Ⅱ遺跡と安養寺Ⅲ遺跡が本調査の対象として絞り込まれた。なお、安養寺Ⅲ遺跡については、遺跡所在範囲が狭く、試掘溝に古式土師器を伴う竪穴住居跡の一角が確認されてしまったことから、確認調査範囲をそのまま平面的に拡げ、引き続き本調査として実施した。安養寺Ⅱ遺跡については、確認した遺構（溝状遺構）の規模が大きいこと、遺跡所在範囲が比較的広いことから確認調査で一旦終結させ、本発掘調査が別途必要である旨の報告を出した（「埋蔵文化財確認調査報告書」平成７年７月）。

こうして安養寺Ⅱ遺跡の本発掘調査実施について水垂土地改良区から「安養寺Ⅱ遺跡の本発掘調査依頼書」の提出があり（平成７年８月）、本発掘調査に向けての協議が始まることとなった。しかし協議の中、この安養寺Ⅱ遺跡の所在する地点が静岡県が指定する急傾斜指定区域にあたっていることから、夏の台風シーズンを前に至急発掘調査を実施されたい旨の強い要望が出された。しかし掛川市教育委員会では即日対応が不可能であることから、静岡県教育委員会を通じ（株式会社）静岡人類史研究所に対応をお願いすることとなった。その結果、（株式会社）静岡人類史研究所から快諾をいただき、水垂土地改良区、掛川市教育委員会、（株式会社）静岡人類史研究所の三者間で「安養寺Ⅱ遺跡発掘調査に関する協定書」を締結し（平成７年８月１６日）、「安養寺Ⅱ遺跡発掘調査連絡会」を設けて発掘調査を実施した。



第1図　安養寺Ⅱ・Ⅲ遺跡位置図

2.遺跡をめぐる環境

（1）地理的環境

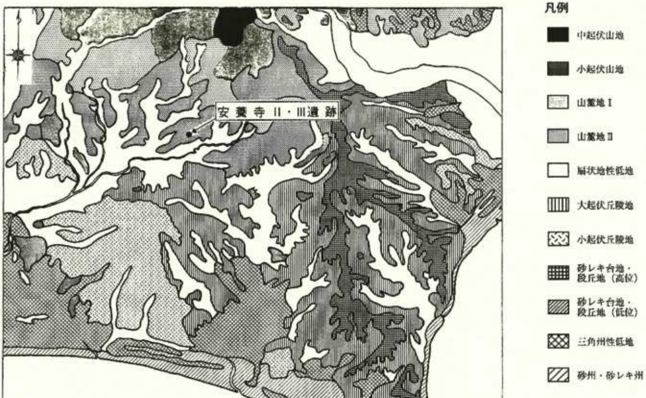
①遺跡の位置

安養寺Ⅱ・Ⅲ遺跡は、掛川市街北東の小起伏の丘陵地帯に位置し、北および北東を県道方の橋・薗ヶ谷線、南を掛川バイパスによって囲まれ、南方は逆川が東から西へ流れる平坦な谷底平野となっている。（第1図）

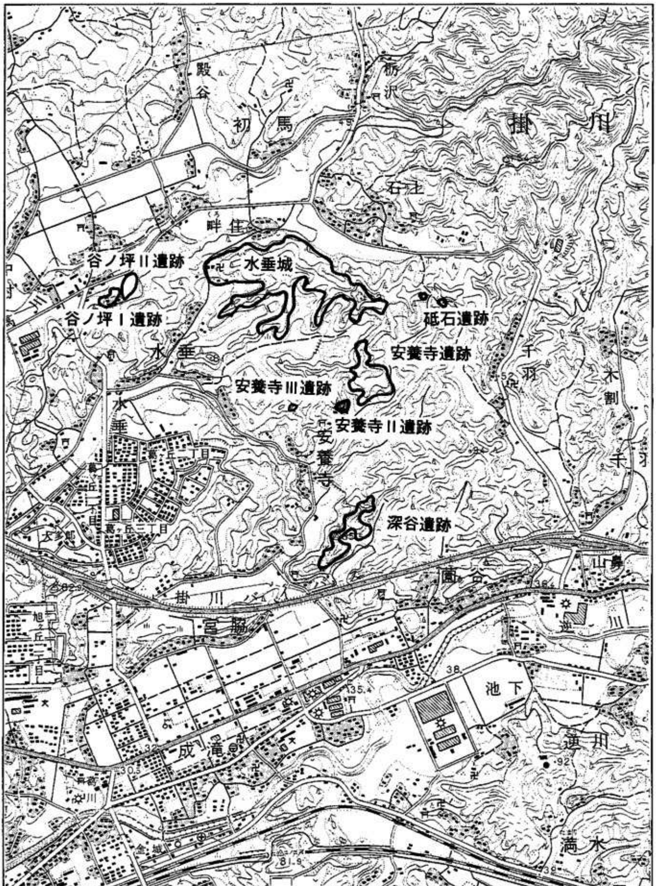
②遺跡周辺の地形

遺跡周辺の地形は第2図に示すとおり、遺跡の北側には山麓地Ⅱ（起伏量100m以下）・山麓地Ⅰ（起伏量200～100m）が位置し、その間に扇状地性低地Ⅰ（河川のつくる堆積地形のうち主として砂礫物質から成る）が入り込んでいる。さらにその北側に小起伏山地（起伏量400～200m、斜面傾斜20°～15°）、中起伏山地（起伏量600～400m、斜面傾斜20°～30°）が連なっている。北側とは対照的に南側は扇状地性低地Ⅰが位置し、小笠山丘陵地で構成されている、新第三紀層から成る大起伏丘陵地（起伏量200～100mの丘陵地）、洪積世前期の厚い砂礫層から成る小起伏丘陵地（起伏量100m以下）に続いている。

安養寺Ⅱ・Ⅲ遺跡は北は山地・山麓地、南は低地・丘陵地に囲まれた標高90～70mの山麓地Ⅱの中にあり、非常に解析の進んだ地形の中に位置している。



第2図　安養寺Ⅱ・Ⅲ遺跡周辺の地形区分図



第3図　安養寺II・III遺跡周辺の遺跡分布図

（2）歴史的環境

本遺跡の周囲には、弥生時代から平安時代に至る遺跡は存在しているものの、縄文時代に至る遺物・遺構は現在のところ本遺跡以外に報告されていない。

砥石遺跡は江戸時代の遺跡で、道状遺構が確認されている。

深谷遺跡は弥生時代後期、古墳時代中期にわたり営まれた集落跡で、奈良時代の小穴から和銅開珎19枚と唐式鏡2枚（花枝双鸞八花鏡、唐花含綬双鳳八花鏡）が出土している。

谷ノ坪Ⅰ遺跡は奈良～平安時代の遺跡で須恵器片が確認されている。

谷ノ坪Ⅱ遺跡は古墳時代後期～奈良時代の遺跡で土師器片が確認されている。

本遺跡の北東に近接する**安養寺遺跡**は弥生時代後期、古墳時代前期、平安時代の遺跡で、遺物は弥生土器から古式土師器片・石鏃が出土しており、住居跡と寺院跡と思われる遺構が確認されている。

『掛川誌稿』によると、安養寺は「曹洞、城東郡西方村龍雲寺末　今は小庵なり、昔の安養寺は山の半腹にありて、舊寺家と呼ぶ此寺天龍寺夢相國師暫く爰に寓居せしことありと云傳ふ。何の時立ち何の年に癈せしか傳なし、恐らくは武田氏の兵火に遭しものならん、白山祠の鰐口に云、遠州佐野郡山口鳴瀧郷安養寺白山之鐘、永正十七年(1520)庚子　五月吉、背に旦那四郎右衛門、同五郎孫と刻せり　五郎孫の子孫あり與五右衛門と云　今白山の小祠に掲げたり、此祠は舊安養寺の鎭守にして、舊趾を鎭守段と云、今の安養寺と云小庵はいつ建しにや、阿彌陀ヶ谷と云所あり、享保中住僧智觀、鎭守の段の畠にて阿彌陀の佛像を堀得て、是古への本尊なるべしとて彩色を設けて今本尊とす」とある。また『掛川市誌』では「西山口字安養寺にあり。今は小庵なれど往昔は相等なる大寺なりしと言う。本尊は畠より掘り出せしものなれど今はなし。（鷲山恭平報告）」との記述があり、本遺跡との関連が注目される。

水垂城は中世の城館で、初馬川の左岸、「城山」と呼ばれる標高100ｍの山頂一帯に築造されており、中世城郭としての遺構を比較的よく遺している。城は主郭のある標高100ｍを最頂部として東西450ｍ、南北150ｍの規模で、細長い尾根上にいくつもの曲輪を配置している。北西側に土居の一部が遺存している。居館は西曲輪の西側、真昌寺境内とみられる。また城から東方へ細長い尾根を150ｍ行ったところに平坦地があり、小曲輪を築造し、防備を固めている。城跡周辺には「別所」「小者ヶ谷」「殿道」「谷別当」などの地名を残している。

3.調査の方法と経過

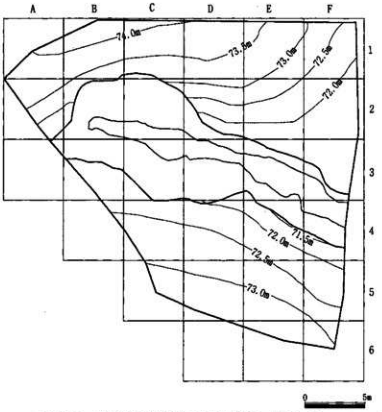
（1）安養寺Ⅱ遺跡

①調査の方法

調査対象地区全体の表土を重機によって排除した後、調査対象地区全体に磁北を南北の基線とする5×5ｍのグリッドを設定した（第4図）。各グリッドは、東西方向は西から東の順にアルファベットのＡ～Ｆ、南北方向は北から南の順に数字の１～６を付し、グリッド名とした。

全面精査は作業員の手作業により行い、精査によって確認された遺構と遺物は実測作業（平面図・断面図・遺物の出土状況図等の作成）を行い、写真撮影を行った。以下その作業を繰り返した。

なお、遺構および遺物の記録には光波測距儀とパーソナル・コンピュータを組み合わせたトータル・ステーション・システム（遺跡図形処理システムソフト）を導入した。



第4図　安養寺Ⅱ遺跡の調査対象区域とグリッド設定図

②調査の経過

8月21日（月）～8月23日（水）重機により表土の除去を行った。

8月23日（水）～8月29日（火）Ａ－２～Ｃ－４グリッド、Ｄ－２～Ｆ－４グリッドの精査を開始し、Ｆ－３グリッドから第１号焼土跡を確認し、その周辺から土器片を確認した。

8月30日（水）～9月13日（水）Ａ－２～Ｄ－４グリッド、Ｅ－３～Ｆ－４グリッドの精査を行ない、Ｂ－３グリッドで第３号焼土跡、Ｃ－３グリッドで第３号土坑、Ｅ－３グリッドで第２号焼土跡、

Ｆ－３グリッドで第２号土坑を確認した。

9月18日（月）～9月26日（火）　最東部にサブトレンチを設定し、下層の確認を行った。その結果、縄文時代の石鏃を確認したため、さらに下層まで精査することとした。Ｃ－２～３グリッド、Ｄ－２～Ｆ－４グリッドの掘り下げと精査を行った。Ｄグリッド以西の地山までの精査を行い完掘した。

9月28日（木）～10月4日（水）
10月6日（金）～10月12日（木）　Ｂ－２グリッドにサブトレンチを設定し、下層の確認を行った。また、Ｄグリッド以東の掘り下げを行い完掘した。Ｅ－３グリッドに第１号土坑を確認した。

10月13日（金）　Ｄ－３、Ｅ－３グリッドにサブトレンチを設定し、下層における遺構・遺物の確認を行い、現場の作業を終了した。

10月14日（土）　空中写真撮影を行った。

（２）安養寺Ⅲ遺跡

①調査の方法

本地点での確認調査は、重機を使用しての掘削と手作業による精査、遺構確認を行っている。本調査はこの確認調査に引き続いて実施したので、まず重機を使用しての表土の除去作業を行い、続いて人工を投入して精査、遺構確認を行い、確認した遺構の調査に入った。調査時における出土遺物の取り上げと確認した遺構の図面作成については、第５図「安養寺Ⅲ遺跡遺構全体図」にも示したとおり、調査地に５ｍ×５ｍのグリッドを設定して行った。この時基準となる杭については、調査地の地形に合わせて任意に設定した。設定した基準線は、南北方向でＮ－３°25′20″－Ｅを測る。

②調査の経過

平成7年5月16日（火）～5月18日（木）　重機による掘削と手作業による精査にて遺跡所在確認調査を実施し、竪穴住居跡を確認した。

5月30日（火）～6月1日（木）　重機による表土の剥ぎ取りと平面掘削作業を実施する。続いて人工による精査、遺構の確認作業に入る。

6月1日（木）～6月5日（月）　確認した竪穴式住居跡ならびに土壙の掘り下げ作業を行い、出土した遺物の写真撮影、実測作業を行う。さらに、確認した遺構の写真撮影、実測図の作成作業を行った。

6月5日（月）　現地作成図面の点検作業の後、設置杭の撤去、作業機材の撤去を行い、現地での調査を終了した。

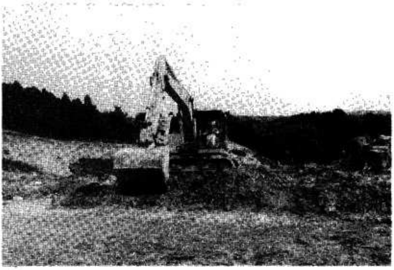
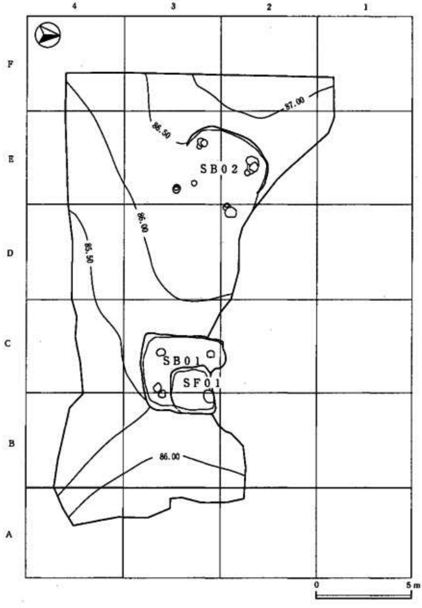


写真１ 安養寺Ⅲ遺跡の重機による掘削風景



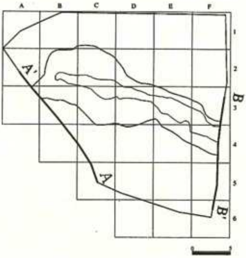
第５図 安養寺Ⅲ遺跡の調査対象区域とグリッド設定図

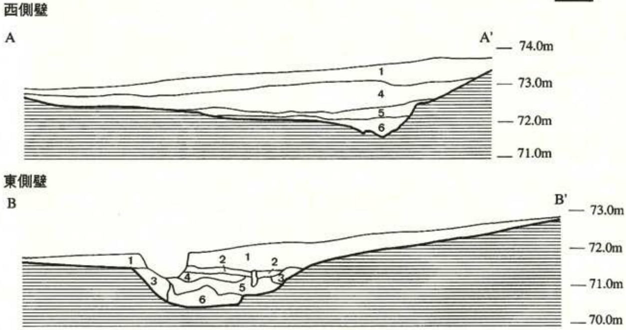
II　安養寺II遺跡の調査

1.層 序

調査対象地区には解析された谷、いわゆる埋没谷に２次堆積した層序が見られる。。

層序は６層が確認された。西側壁と東側壁は堆積状況は異なっているが、内容は同じである。各層の状況は以下の通りである。





第６図　安養寺II遺跡の層序

第１層　表土。暗茶褐色土で、粘性・締まりともにやや弱い。

第２層　暗茶褐色土で、径10㎝大の礫を含む。粘性はやや弱く、締まりはやや強い。

第３層　明黄褐色土で、礫層。全体に堆積しておらず、ブロック状に入り込んでいる。

第４層　暗黄褐色土で、径２～５㎜大の赤色粒と礫を微量に含んでいる。粘性はやや弱く、締まりはやや強い。平安時代の遺物と平安時代以降に掘り込まれたと思われる遺構が確認された。

第５層　暗黄褐色土で、径２㎜～１cm大の赤色粒をやや多く含み、径２㎜～１cm大の炭化粒を少量含んでいる。また、径5cm～10cm大の礫を含んでいる。粘性はやや弱く、締まりはやや強い。平安時代の遺物と平安時代以降に掘り込まれたと思われる遺構が確認された。

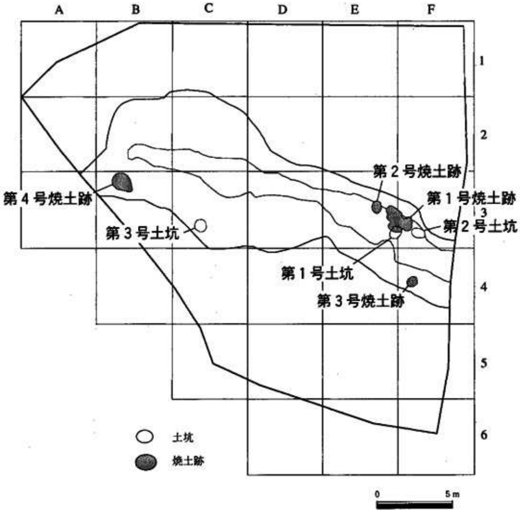
第６層　明黄褐色土で、径５㎜～３cm大の赤色粒をやや多く含んでいる。粘性・締まりともにやや強い。縄文時代の遺物が確認された。

2.遺　構

今回の調査で確認された遺構は、土坑が３基、焼土跡が４箇所である。（第７図）

土坑は調査区東側のＥ－３～Ｆ－３グリッドから第１号土坑、その確認面の上層から第２号土坑、西側のＣ－３グリッドから第３号土坑を確認した。第１号土坑の位置は第１号焼土跡の直下で若干重なっている。

焼土跡は調査区東側のＥ－３～Ｆ－３グリッドから第１号焼土跡、Ｅ－３グリッドから第２号焼土跡、Ｆ－４グリッドから第３号焼土跡、調査区西側のＢ－３グリッドから第４号焼土跡を確認した。なお、焼土跡は焼土粒・炭化物等が確認面において明確に認められるプランを焼土跡として捉えた。



第７図　安養寺Ⅱ遺跡の遺構全体図

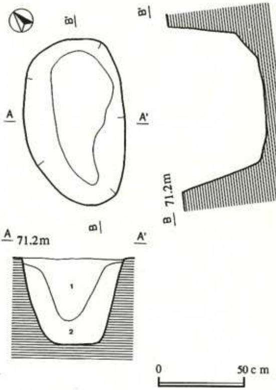
（1）土坑

①第１号土坑（第８図）

調査区の東側のＥ－３～Ｆ－３グリッドに位置し、確認面の標高は71.0mである。

平面形状は不整形な楕円形で、断面形状は上に開くＵ字形を呈している。規模は長径98.5㎝、短径67.5㎝、深さは最深部で62.0㎝あり、長軸の方向はＮ－37°－Ｅを指している。覆土は２層に分けられ、第１層は暗黄褐色土で径5㎜～１㎝大の赤色粒をやや多く含み、炭化物を多く含む。粘性はやや強く、しまりはやや弱い。第２層は暗黄褐色土で１層と同じであるが、赤色粒を微量に含み、炭化物は含んでいない。

遺物は覆土中から条痕紋土器片１点が出土した。ただし、上部から落ち込んだ可能性がある。

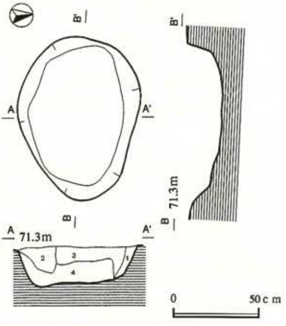


第８図　第１号土坑の平・断面図

②第２号土坑（第９図）

調査区の東側のＦ－３グリッドに位置し、確認面の標高は71.2mである。平面形状は不整形な楕円形で、断面形状は上に開くＵ字形を呈している。規模は長径95.5㎝、短径69.5㎝、深さは最深部で23.0㎝あり、長軸の方向はＮ－80°－Ｗを指している。　覆土は４層に分けられ、第１層は明茶褐色土で粘性は弱く、しまりは強い。第２層は暗茶褐色土で、全体に炭化物が分布し、表面には炭化物の塊も見られる。赤色粒を少量含む。粘性は弱く、しまりは強い。第３層は暗茶褐色土で赤色粒を多く含み、炭化物の塊も見られる。粘性は弱く、しまりは強い。第４層は明茶褐色土で、第１層と同じ色であるが赤色粒をやや多く含み、炭化物を少量含む。粘性は弱く、しまりは強い。

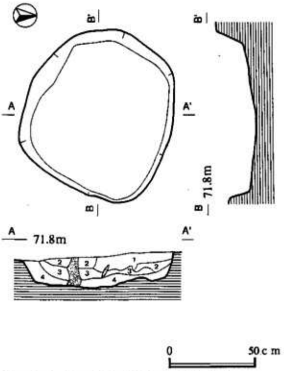
遺物は覆土中から灰釉陶器片が１点出土した。



第９図　第２号土坑の平・断面図

③第３号土坑（第10図）

調査区の西側のＣ－３グリッドに位置し、確認面の標高は71.7mである。平面形状は不整形な楕円形で、断面形状は皿状を呈している。規模は長径99.5㎝、短径88.5㎝、深さは最深部で23.0㎝ある。覆土は４層に分けられ、第１層は暗黄褐色土で、径２㎜～２㎝大の赤色粒を多量に含み、炭化物をやや多く含む。粘性はやや弱く、しまりは強い。第２層は明黄褐色土で、径１㎜～１㎝大の赤色粒をやや多く含み、炭化物を少量含む。粘性はやや弱く、しまりは強い。第３層は黒色土で、炭化物から成る層である。赤色粒も微量に含んでいる。粘性はやや弱く、しまりは弱い。第４層は明黄褐色土で径１㎜～５㎝大の赤色粒を微量に含む。底面には地山の礫が露出している。粘性・しまりともにやや弱い。遺物は覆土中から灰釉陶器片１点が出土している。



第10図　第３号土坑の平・断面図

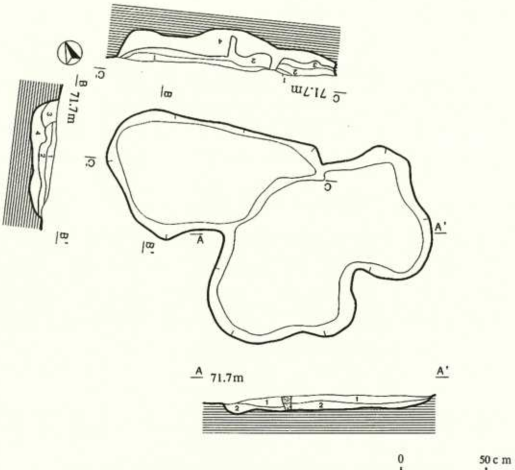
（２）焼土跡

①第１号焼土跡（第11図）

第１号焼土跡は調査区の東側のＥ－３～Ｆ－３グリッドに位置し、確認面の標高は71.5mである。平面形状は不整形である。規模は南北方向の最大長１.７m、東西方向の最大長1.7mの範囲に広がっており、深さは最深部で23.0㎝ある。場所によって焼土の色調が異なっている。遺物は焼土跡の周辺から灰釉陶器片が34点出土した。覆土内から遺物は出土しなかった。覆土は南部分（断面Ａ－Ａ'）が２層に、北部分（Ｃ－Ｃ'）が４層に分けられる。

南部分（断面Ａ－Ａ'）に覆土は第１層は橙色でレンガ状に固くしまった焼土。第２層は暗赤褐色土で炭化物を含み、赤色粒を微量含む。粘性はやや弱く、しまりはやや強い。

北部分（Ｃ－Ｃ'）の覆土は第１層は暗赤褐色土で径５㎜～１㎝大の赤色粒を含む。粘性は弱く、しまりはやや強い。第２層は明赤褐色土でレンガ状のブロック、礫、赤色粒を含む。粘性は弱く、しまりはやや強い。第３層は明黄褐色土で径２～５㎜大の赤色粒、炭化物を含む。粘性・しまり共にやや弱い。第４層は明黄褐色土で炭化物、赤色粒を微量含む。粘性・しまり共にやや弱い。

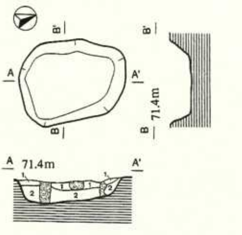


第11図　第1号焼土跡の平・断面図

②第2号焼土跡（第12図）

第2号焼土跡は調査区の東側のＥ－３グリッドに位置し、確認面の標高は71.3ｍである。平面形状は不整な楕円形で、断面形状は上に広く開くＵ字形を呈している。規模は長径63.5㎝、短径は48.2㎝、深さは最深部で13.0㎝あり、長軸の方向はＮ－20°－Ｅを指している。覆土は２層に分けられ、第１層は暗赤褐色の焼土で、レンガ状に固まった焼土を含んでいる。粘性はやや弱く、締まりはやや強い。第２層は暗黄褐色土で径２㎜～１㎝大の炭化物を少量含む。粘性・しまり共にやや弱い。

遺物は出土しなかった。



第12図　第2号焼土跡の平・断面図

③第３号焼土跡（第13図）

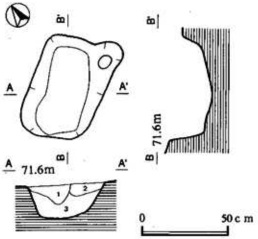
第３号焼土跡は調査区の東側のＦ－４グリッドに位置し、確認面の標高は71.5ｍである。平面形状は不整形である。断面形状は上に開くＵ字形を呈している。規模は長径61.4㎝、短径は45.9㎝、深さは最深部で19.9㎝あり、長軸の方向はＮ－38°－Ｅを指している。覆土は３層に分けられ、第１層は暗赤褐色土で、赤色粒、炭化物を微量含む。粘性・しまり共にやや弱い。第２層は赤色粒をやや多く含み、炭化物を少量含む。粘性はやや弱く、しまりはやや強い。第３層は暗黄褐色土で礫を含む。粘性はやや強く、しまりは弱い。

遺物は出土しなかった。

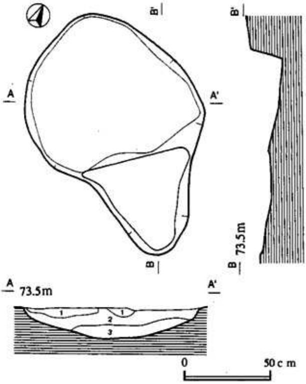
④第４号焼土跡（第14図）

第４号焼土跡は調査区に西側のＢ－３グリッドに位置し、確認面の標高は73.5ｍである。平面形状は不整形である。断面形状は上に広く開くＵ字形を呈している。規模は長径148.8㎝、深さは最深部で18.0㎝あり、長軸の方向はＮ－39°－Ｗを指している。覆土は３層に分けられる。第１層は暗赤褐色土で炭化物を大量に含み、赤色粒をやや多く含む。粘性・しまり共にやや弱い。第２層は暗黄褐色土で炭化物をやや多く含み、赤色粒を少量含む。粘性はやや弱く、しまりはやや強い。第３層は炭化物を微量に含み、径１～３㎝大の礫を含む。粘性・しまりは共にやや弱い。

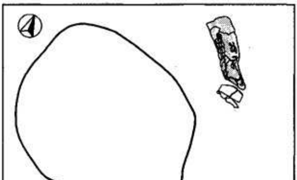
遺物は覆土中第２層から土師質土器が１点確認された。また周辺から長径28㎝、短径11㎝大の炭状の炭化物と、炭化物に掛かる状態で土師質土器が１点出土した（第15図）。



第13図　第３号焼土跡の平・断面図



第14図　第４号焼土跡の平・断面図



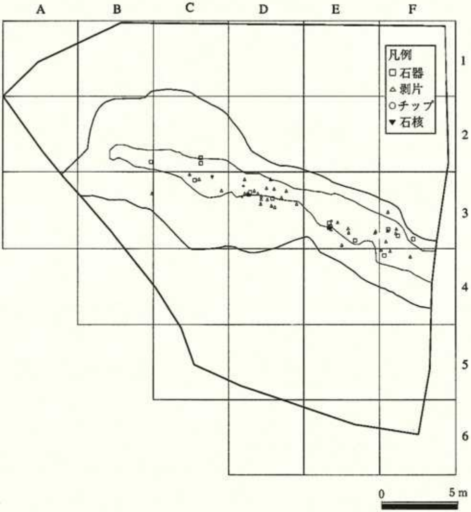
第15図　第４号焼土跡周辺の土器と炭化物の出土状況

3.遺　物

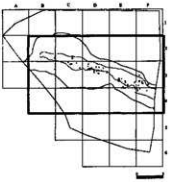
（1）石器

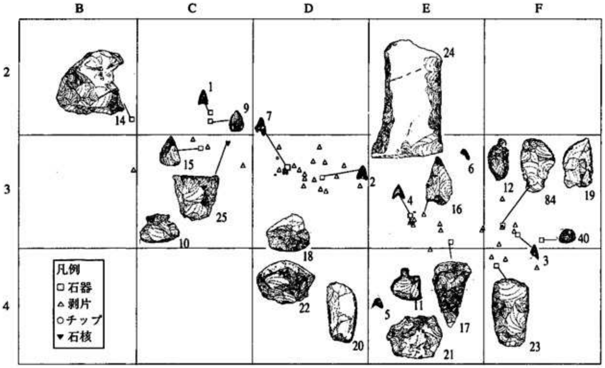
安養寺Ⅱ遺跡から石器関係の遺物は84点出土した。その内訳は石鏃8点、スクレイパー1点、石匙3点、加工痕のある剥片10点、打製石斧2点、石核もしくは石核と思われるもの2点、剥片35点、チップ14点である（第16図）。

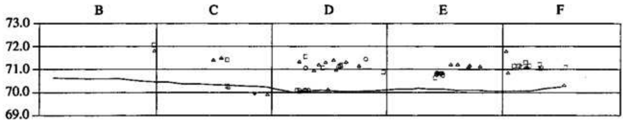
石材は出土点数が少ない割には種類が多く、シルト・チャート・石灰岩・泥岩・粘板岩・凝灰岩・玄武岩・黒曜石・砂岩・安山岩・カンラン石玄武岩（溶岩）が石器に使用されている。その他石英・泥灰岩・緑色凝灰岩・硅化木・花崗岩質岩・水晶などの破片や比較的大きな砂岩質の円礫、角礫が確認された。



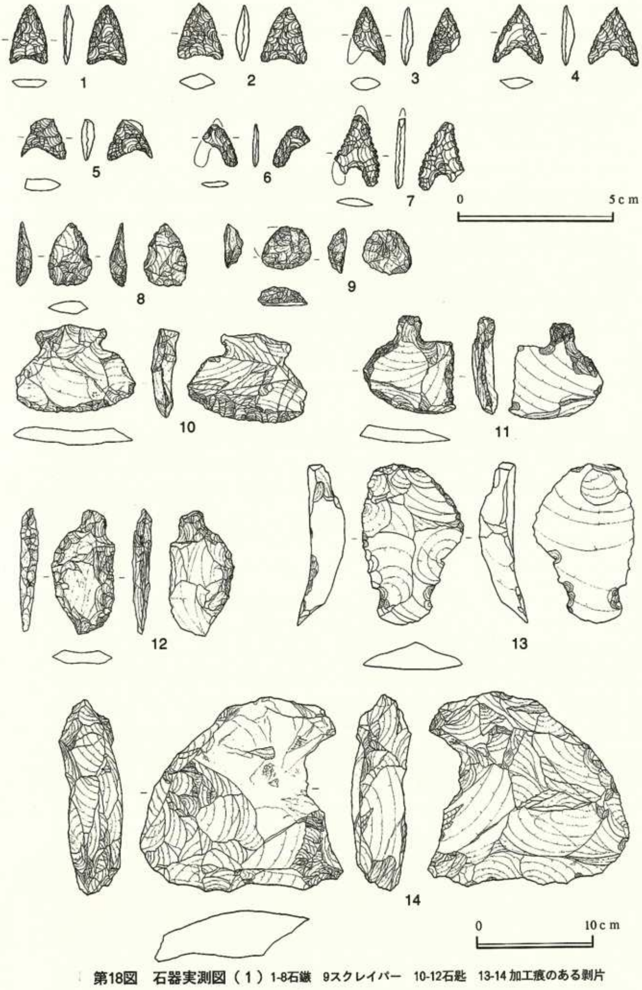
第16図　石器分布図







第17図　石器類の出土分布図（平・断面図）



第18図 石器実測図（1）1-8石鏃 9スクレイパー 10-12石匙 13-14 加工痕のある剝片

①石鏃（第18図）

石鏃は８点出土した。形態はいずれも凹基無茎鏃であるが、さらに細かく特徴を見ると４種類に分けられる。なお１点は未完成品と思われる。

1）抉りが浅いもの

１はＣ－２グリッドから出土した。表裏面とも調整加工が施されているが、磨滅によるためか粗い調整痕のみ確認できる。最大長2.3cm、最大幅1.3cm、最大厚0.3cm、重0.69gを測る。石材は凝灰岩である。

２はＤ－３グリッドから出土した。表裏面とも丁寧な調整加工が施されている。最大長1.8cm、最大幅1.5cm、最大厚0.3cm、重さ0.89gを測る。石材は凝灰岩である。

2）抉りが器長の１／４を占めるもの

３はＦ－３グリッドから出土した。右側脚端部を欠損している。表面全面と裏面の両側縁に丁寧な調整加工が施されている。裏面に素材面を残している。最大長1.9cm、最大幅1.2cm、最大厚0.4cm、残存している重さは0.55gを測る。石材は玄武岩である。

４はＥ－３グリッドから出土した。表面全面と裏面の両側縁、左脚に丁寧な調整加工が施されている。裏面に素材面を残している。また、先端部分を内彎させ尖らせている。最大長2.0cm、最大幅1.7cm、最大厚0.4cm、重さ0.63gを測る。石材は砂岩である。

５はＥ－４グリッドから出土した。先端部と右脚が欠損している。表裏面とも丁寧な調整加工が施されている。推残存部の最大長2.3cm、残存部の最大幅2.0cm、最大厚0.5cm、残存している重さは0.47gを測る。石材は黒耀石である。

3）抉りが器長の１／２を占めるもの

６はＥ－３グリッドから出土した。先端部と右脚が欠損する。表裏面とも丁寧な調整加工が施されている。推定の最大長1.7cm、推定の最大幅1.4cm、最大厚0.2cm、残存している重さは0.18gを測る。石材は石灰岩である。

4）鋸歯状

７はＤ－３グリッドから出土した。先端部と左脚、右脚先端部を欠損している。表裏面とも丁寧な剥離調整が施され、両側縁は鋸歯状に加工されている。右側縁は内彎している。残存部の最大長2.5cm、残存部の最大幅1.6cm、最大厚0.3cm、残存している重さは0.73gを測る。石材はシルト岩である。

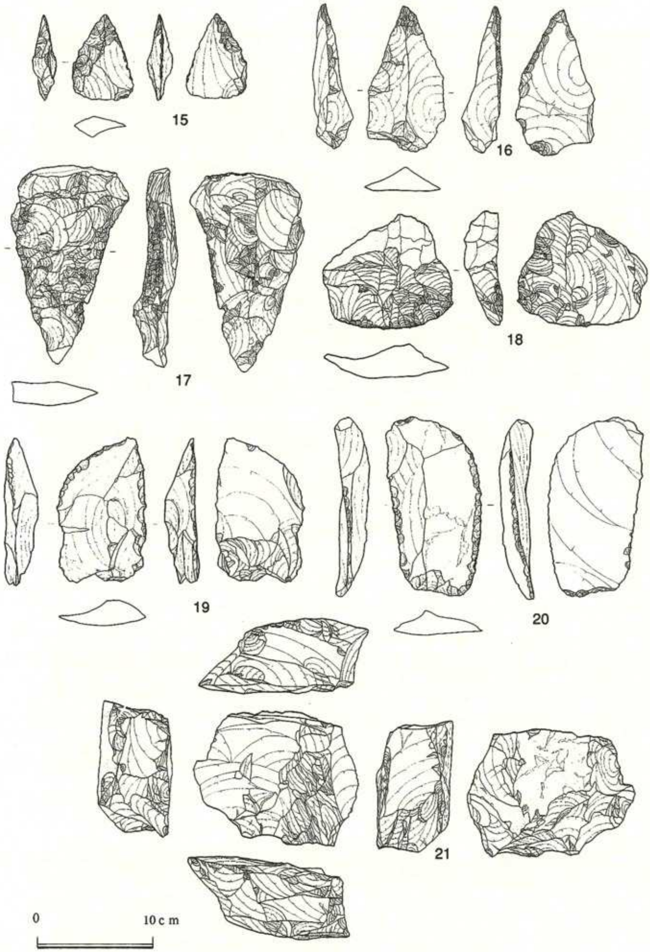
5）未加工品

８はＣ－２グリッドから出土した。両側縁ともやや張り出し、弧状に張り出している部位には両側面よりは若干細かいものの、粗い剥離痕が見られる。裏側のほぼ全周にも非常に粗い剥離痕が見られる。最大長は2.7cm、最大幅1.9cm、最大厚0.7cm、重さ 2.98gを測る。石鏃の未完成品と思われる。石材は砂岩である。

②スクレイパー（第18図）

スクレイパーは２点出土した。

９はＦ－３グリッドから出土した小型のラウンドスクレイパーである。ほぼ円形の素



第19図　石器実測図（2）15-21 加工痕のある剥片

材を用い全周に粗い調整加工が施され、裏側も調整加工されている。最大長は2.2cm、最大幅は1.9cm、最大厚は0.8cm、重さ2.74gを測る。石材は石灰岩である。

③石匙(第18図)

石匙は4点出土した。

10は横長剥片を素材としている。右側縁の上部は凹状に作り出し、左側縁上部は二次剥離の凹状部を未加工で使用したと思われる。右側縁には連続する細かい剥離が見られる。最大長は5.2cm、最大幅3.9cm、最大厚0.9cm、重さ19.01gを測る。石材は玄武岩である。

11はE－4グリッドから出土した。縦長剥片を素材としている。素材のほぼ全周に調整加工を施しているが、特に左右側縁上部は表裏面とも丁寧な調整加工によってつまみを作り出している。右側縁中央部は連続するやや粗い剥離によって刃部を作り出している。最大長は4.4cm、最大幅4.1cm、最大厚0.6cm、重さ13.40gを測る。石材は泥岩である。

12はF－3グリッドから出土した。横長剥片を素材としている。左側縁下部は欠損している。素材のほぼ全周に調整を施しているが、特に左右側縁上部は表裏面からの調整加工によってつまみを作り出している。右側縁下部は連続する剥離によって刃部を作り出している。最大長は5.4cm、最大幅2.7cm、最大厚0.6cm、重さ10.43gを測る。石材は石灰岩である。

④加工痕のある剥片(第18・19・20図)

加工痕のある剥片は9点出土した。

13はF－3グリッドから出土した。打面と打瘤を残す縦長剥片を素材とし、左側縁と右側縁上部に剥離痕が見られる。裏側の両側縁下部は調整加工により抉られている。最大長7.1cm、最大幅4.5cm、最大厚1.5cm、重さは30.15gを測る。石材は凝灰岩である。

14はB－2グリッドから出土した剥片で、左側縁に加工痕が見られる。最大長8.9cm、最大幅8.5cm、最大厚2.7cm、重さ173.86gを測る。石材は石灰岩である。

15はC－3グリッドから出土した。二等辺三角形を呈している横長剥片を素材とし、左側面と右側面上部に粗い調整加工が施されている。裏側も右側縁上部に粗い調整加工が施されている。最大長3.8cm、最大幅2.7cm、最大厚1.1cm、重さ5.69gを測る。石材は安山岩である。

16はE－3グリッドから出土した。横長剥片を素材とし、先端部と基部に粗い調整加工が施されている。また、裏側の左側縁の上部～中央部と右側縁先端部に調整加工が施されている。最大長6.3cm、最大幅3.4cm、最大厚1.5cm、重さ17.74gを測る。石材は安山岩である。

17はE－3グリッドから出土した剥片で、右側縁中央部の表裏に調整加工が施されている。最大長8.6cm、最大幅5.1cm、最大厚1.3cm、重さ52.07gを測る。石材は玄武岩である。

18はD－3グリッドから出土した剥片で、上部に自然面が残っている。下部は鋭く

尖った二次剥離面に、さらに細かな剥離を行い、刃部を作り出している。最大長は5．0cm、最大幅5.5cm、最大厚1.4cm、重さ39.81gを測る。石材はチャートである。

19はE－4グリッドから出土した。縦長剥片を素材とし、左側縁上部と右側縁に調整加工を施している。裏面は素材面を大きく残している。最大長6.6cm、最大幅3.9cm、最大厚1.1cm、重さ28.34gを測る。石材は泥岩である。

20はF－3グリッドから出土した。縦長剥片を素材とし、左側縁中央部～下部、右側縁、基部に調整加工が施されている。裏側は基部に粗い調整加工を施している。表面右側に自然面が残り、裏面は素材面がそのまま残っている。。最大長8.1cm、最大幅3.9cm、最大厚1.2cm、重さ34.10gを測る。石材　は黒色安山岩である。

21はE－3グリッドから出土した。表面のおよそ下半部分に自然面を残している。左側縁上部に加工痕が見られる。最大長7.3cm、最大幅5.6cm、最大厚3.2cm、重さ165.18gを測る。石材は泥岩である。

22はE－3グリッドから出土した。亜円礫を素材とし、上部に自然面を残している。基部の表面に粗い加工痕が見られる。削器としての使用が考えられる。最大長7.8cm、最大幅5.8cm、最大厚4.5cm、重さ170.30gを測る。石材は泥岩である。

⑤打製石斧（第20図）

打製石斧は2点出土した。

23はE－4グリッドから出土した。大型の剥片を素材としている。形状は短冊形で、下部は欠損している。両側縁部は表裏両面から調整加工を施し、形を整えている。裏面は大部分自然面が残っている。最大長14.7cm、最大幅9.4cm、最大厚2.7cm、重さ533.36gを測る。石材は砂岩である。

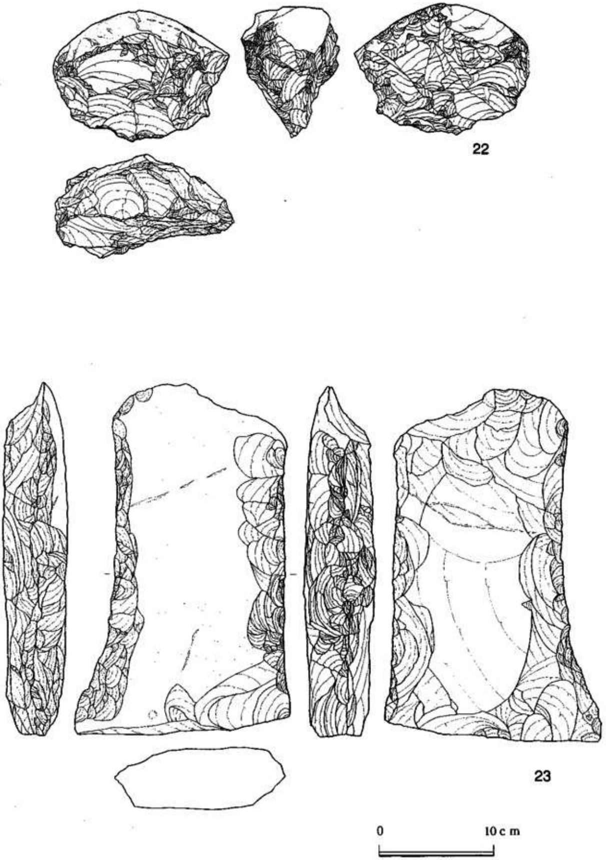
24はF－3グリッドから出土した。比較的小型で薄い剥片を素材としている。形態は短冊形で、刃は片刃である。両側縁部は表裏両面から調整加工を施し、形を整えている。裏面は大部分自然面が残っている。最大長8.9cm、最大幅4.9cm、最大厚1.6cm、重さ84.33gを測る。石材は安山岩である。

⑥石核（第21図）

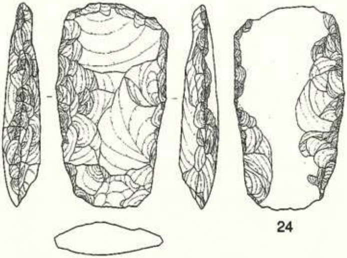
石核は2点出土した。

25はF－3グリッドから出土した。形状は角錐体にちかく、正面・裏面・下面に剥離面が10面ある。上面に自然面が残る。剥片剥離作業面は10面である。最大長7.8cm、最大幅6.2cm、最大厚6.1cm、重さ281.85gを測る。石材は砂岩である。

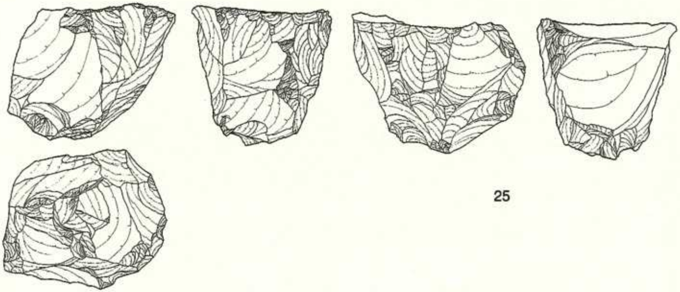
26はF－3グリッドから出土した。円柱形で正面・側面に剥離面が6面ある。上・下・裏面に自然面が残る。最大長6.9cm、最大幅6.2cm、最大厚4.6cm、重さ245.96gを測る。石材はカンラン石玄武岩（溶岩）である。



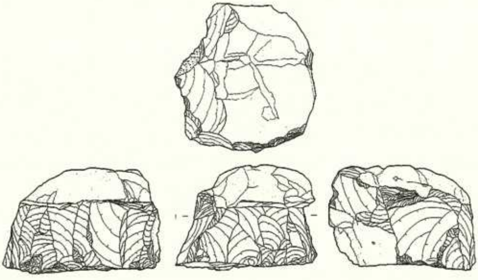
第20図　石器実測図（3）22 加工痕のある剥片　23 打製石斧



24



25

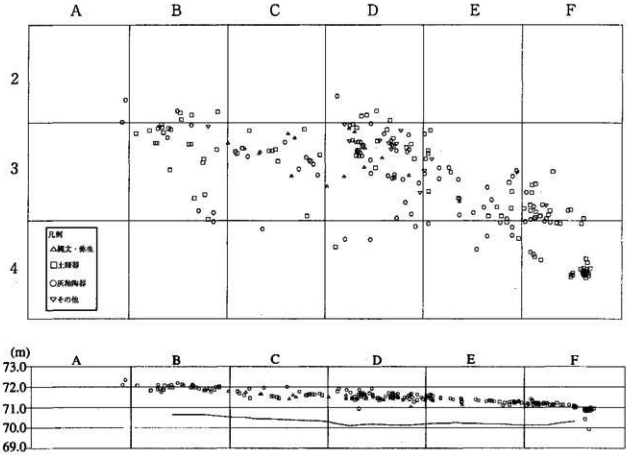


26

第21図　石器実測図（4）24 打製石斧　25-26 石核

（2）土　　器

安養寺II遺跡から出土した土器は315点ある。大きく分けると、縄文土器、弥生土器、灰釉陶器、土師質土器に分類される。



第22図　土器出土分布図（平・断面図）

①縄文土器・弥生土器（第23図）

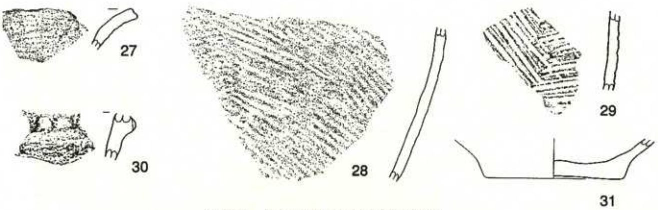
27はF－4グリッドから出土した縄文土器の口縁部の破片で、口縁部は外反している。内・外面とも磨滅が著しいが、外面に横位の条痕紋状の圧痕が見られる。色調は橙色である。

28は第1号土坑の覆土中から出土した縄文土器の甕の体部と思われ、内・外面とも磨滅が著しいが、外面には斜位の条痕紋状の圧痕が見られる。色調は橙色である。

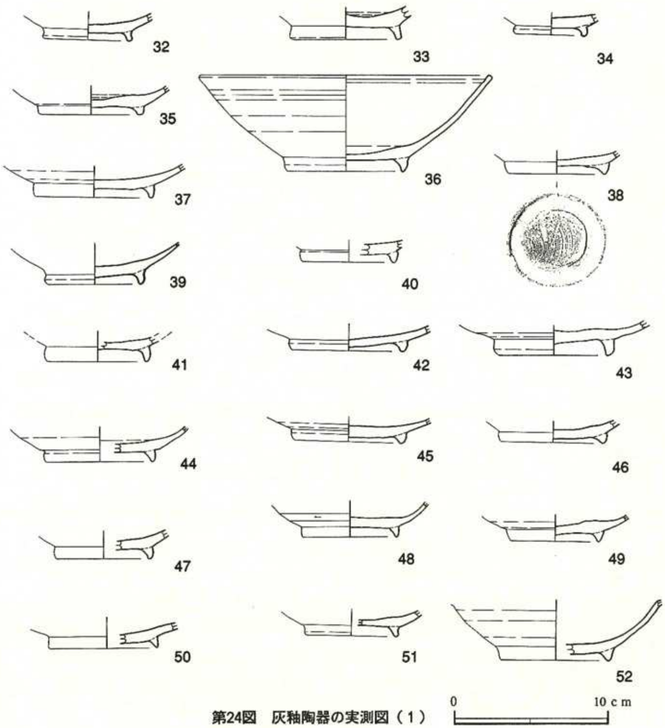
29はC－3グリッドから出土した甕の体部の破片で、外面に条痕紋状の圧痕が見られる。色調はにぶい黄橙色である。

30はB－3グリッドから出土した弥生土器と思われる口縁部の破片で、口唇部に隆帯をもつ。内・外面とも剥落部分が目立ち、調整方法は不明である。色調は橙色である。

31はB－3グリッドから出土した弥生土器と思われる底部で、厚手である。底径は9cmある。内・外面とも磨滅が激しく調整方法は不明である。胎土は砂粒、白・赤色粒を含み、色調はにぶい黄橙色である。



第23図　縄文土器・弥生土器実測図



第24図　灰釉陶器の実測図（1）

②灰釉陶器（第24・25図）

出土数は少なく、いずれも破片が多い。中には器種を判別するのが困難な土器片もあるが、碗・小碗・長頸壺・浄瓶・平瓶等が出土している。

1）碗・小碗

本遺跡から出土した碗・小碗はほとんどが破片であるが、比較的底部が多く出土しているため、底部の特徴により分類を行った。なお、いずれも各グリッド内から出土したものである。

a）高台の断面が方形のもの

32はＥ－４グリッドから出土した碗の底部の破片で、高台径は推定で5.8cmある。内面にわずかに釉が付着している。底部はヘラ削りした後、高台部をナデ付けている。内・外面ともにナデ調整が施されている。なお、内面に指頭痕が残っている。胎土は白色粒を含み、色調は灰白色である。

33はＣ－３グリッドから出土した碗の底部の破片で、高台径は推定6.8cmある。回転糸切りした後、高台をナデ付けている。胎土は白色粒・黒色粒を微量に含み、色調は灰白色である。

34はＣ－３グリッドから出土した碗の底部の破片で、高台径は推定4.6cmある。高台は底部をヘラ削りした後、高台をナデ付けている。胎土は白色粒を含み、色調は灰白色である。

35はＣ－３グリッドから出土した碗の底部で、高台径は6.8cmある。内面に自然釉が付着しいる。底部は回転糸切りした後、高台部をナデ付けている。胎土は黒色粒を含み、色調は灰黄色である。

b）高台の断面が三日月形のもの

36はＢ－３～Ｂ－４グリッドから出土した碗の底部から口縁部で、体部はやや緩く立ち上がり、口縁部の内面下に沈線が見られる。口径は推定で19.0cm、器高は6.4cm、高台径は7.6cmある。底部は回転糸切りした後、高台をナデ付けている。内・外面ともにナデ調整が施さている。胎土は白色粒を微量に含み、色調は灰白色である。

37はＢ－３グリッドから出土した碗の底部で、高台径は7.6cmある。底部はヘラ削りした後、高台をナデ付けている。内・外面ともにナデ調整が施されている。胎土は白色粒・砂粒を微量に含み、色調は灰白色である。

38はＣ－３グリッドから出土した碗の底部で、高台径は6.4cmある。底部は回転糸切りした後、高台をナデ付けている。胎土は黒色粒を少量含み、色調は灰白色である。

39はＤ－２グリッドから出土した碗の底部の破片で、体部は緩やかに内彎して立ち上がる。内面に釉が付着している。高台径は推定で6.2cmある。底部はヘラ削りした後、高台部をナデ付けている。胎土は白色粒を含み、色調は灰白色である。

40はＥ－３グリッドから出土した碗の底部の破片で、高台径は推定6.0cmある。内・外面ともにナデ調整が施され、底部は回転糸切りした後、高台部をナデ付けている。胎土は黒色粒を含み、色調は灰黄色である。

41はD－3グリッドから出土した碗の底部の破片で、高台径は推定6.5cmある。内面の一部に自然釉が付着している。内・外面ともにナデ調整が施されている。底部は回転糸切りした後、高台部をナデ付けている。胎土は砂粒、黒色粒を含み、色調は灰白色である。

42はF－3グリッドから出土した碗の底部の破片で、高台径は推定で7.4cmある。体部外面はヘラ削り、内面はナデ調整が施され、底部はヘラ削りした後、高台部をナデ付けている。胎土は白色粒を含み、色調は灰白色である。

43はC－3グリッドから出土した碗の底部で、高台径は8.2cmある。体部は内・外面ともにナデ調整が施され、底部はヘラ削りした後、高台部をナデ付ている。胎土は白色粒を少量含み、色調は灰色である。

c）高台の断面が三角形のもの

44はE－4グリッドから出土した碗の底部の破片で、高台径は推定7.0cmある。内・外面ともにナデ調整が施されている。胎土は砂粒、黒色粒を含み、色調は灰白色である。

45はE－3～E－4グリッドから出土した碗の底部で、高台径は7.2cmある。底部はヘラ削りした後、高台をナデ付けている。胎土は砂粒を含み、色調は灰白色である。

46はC－3グリッドから出土した碗の底部の破片で、高台径は推定で6.9cmある。底部は回転糸切りした後、高台部をナデ付けている。内・外面ともにナデ調整が施されている。胎土は黒・白色粒を含み、色調は灰白色である。

47はF－3グリッドから出土した碗の底部の破片で、高台径は推定で6.2cmある。内面に釉が残る。底部はヘラ削りした後、高台部をナデ付けている。内・外面ともにナデ調整が施されている。胎土は白色粒を含み、色調は灰色である。

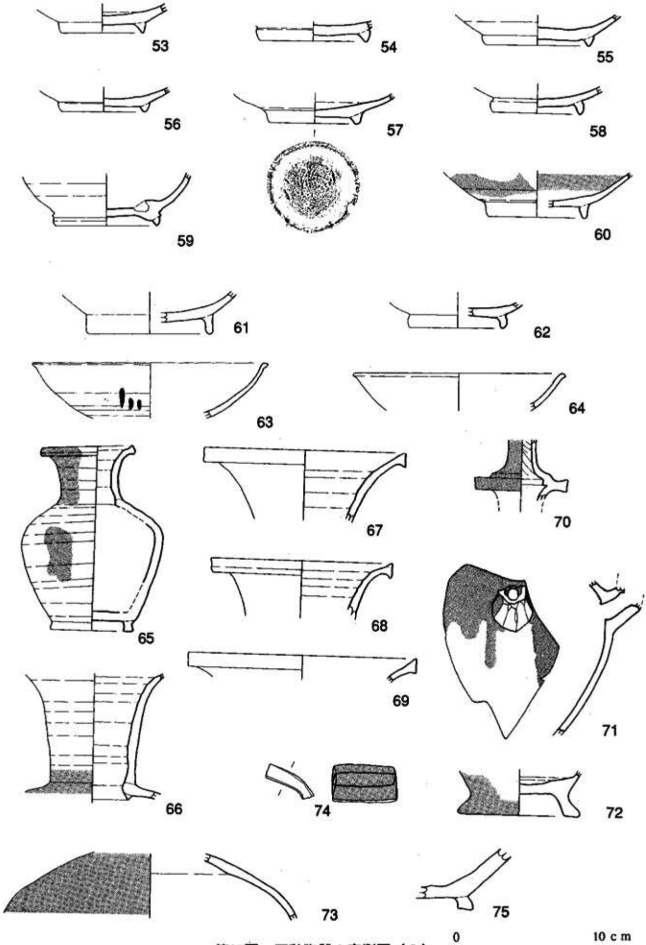
48はE－4グリッドから出土した碗の底部で、高台径は6.2cmある。底部内面に自然釉が付着している。外面にヘラ調整が施され、底部は回転糸切りした後、高台部をナデ付けている。胎土は黒・白色粒を含み、色調は灰白色である。

49はD－3グリッドから出土した碗の底部の破片で、高台径は推定6.9cmある。底部に自然釉が多く付着している。内・外面ともにナデ調整が施され、底部は回転糸切りした後、高台部をナデ付けている。胎土は黒色粒を少量含み、色調は灰白色である。

50はD－3グリッドから出土した碗の底部の破片で、高台径は推定で7.8cmある。底部はヘラ削りした後、高台部をナデ付けている。体部外面下半部はナデ調整が施されている。胎土は白色粒を含み、色調は灰色 である。

51はC－3グリッドから出土した碗の底部で、高台径は5.9cmある。内・外面ともにナデ調整が施され、底部は回転ヘラ削りした後、高台部をナデ付けている。胎土は砂粒、白色粒を含み、色調は灰色である。

52はC－3グリッドから出土した碗の底部の破片で、高台径は推定で7.2cmある。体部は緩やかに内彎して立ち上がり、口縁部付近で外に引き出されていると思われる。底部の調整方法は磨滅して不明であるが、高台はナデ付けられている。内・外面ともにナデ調整が施されている。胎土は白色粒を含み、色調は淡黄色である。



第25図 灰釉陶器の実測図（２）

0 10cm

53はC－3グリッドから出土した小碗の底部の破片で、高台径は推定5.4cmある。底部内面に自然釉が付着している。底部は切り離した後、高台部を丁寧にナデ付けている。胎土は黒・白色粒を含み、色調は灰白色である。

54はC－3グリッドから出土した碗の底部の破片で、高台径は推定6.9cmある。内・外面ともにナデ調整が施されている。胎土は砂粒を含み、色調は灰黄色である。

55はC－3グリッドから出土した碗の底部の破片で、高台径は6.8cmある。底部は回転糸切りした後、高台部をナデ付けている。胎土は砂粒を含み、色調は灰白色である。

56はC－3グリッドから出土した碗の底部の破片で、高台径は推定5.4cmある。内面に自然釉が付着している。内・外面ともにナデ調整が施され、底部は回転糸切りした後、高台部をナデ付けている。胎土は砂粒を含み、色調は灰黄色である。

57はC－4グリッドから出土した碗の底部で、高台径は5.9cmある。底部は回転糸切りした後、高台部をナデ付けている。胎土は白色粒を含み、黒色粒を微量に含む。色調は灰白色である。

58はD－3グリッドから出土した碗の底部で、高台径は5.6cmある。底部はヘラ削りした後、高台をナデ付けている。胎土は黒色粒をやや多く含み、色調は浅黄色である。

59はE－3グリッドから出土した碗の体部から底部の破片で、高台径は推定で6.6cmある。底部は一部破裂している。内・外面ともにナデ調整が施され、底部はヘラ削りした後、高台部をナデ付けている。胎土は砂粒を含み、色調は暗青灰色である。

60はC－3グリッドから出土した碗の底部で、高台径は推定6.4cmある。また、内・外面に釉を付け掛けしている。底部は一部ヘラ削りした後、高台部をナデ付けている。胎土は白色粒を含み、色調は灰色である。

d）高台の断面が弓状に湾曲したもの

61はC－3グリッドから出土した碗の底部の破片で、高台径は推定で8.8㎝ある。高台部は細く高い。底部はヘラ削りした後、高台をナデ付けている。胎土は白色粒を含み、色調は灰白色である。

62はE－3グリッドから出土した碗の底部の破片で、高台径は推定で6.2cmある。接地部は面取りされている。底部は回転糸切りした後、高台部をナデ付けている。胎土は精製で、色調は灰白色 である。

e）その他

63はE－3グリッドから出土した碗の口縁部から体部で、緩やかに内彎する体部から口唇部を僅かに外に引き出している。体部に墨書が施され、文字は2本の縦位の線がかすかに見えるものの、判読できない。口径は推定15.4cmある。上半部はナデ調整が施され、下半部はヘラ削りが施されている。胎土は砂粒、黒・白色粒を含み、色調は灰白色である。

64はB－3グリッドから出土した碗の口縁部で、口径は推定で13.8cmある。口唇部付近でわずかに外反する。内・外面ともにナデ調整が施されている。胎土は白・赤色粒を含み、色調はにぶい赤褐色である。

2）長頸瓶

65はC－3グリッドから出土した小型の長頸瓶の完形品で、口縁部は外反し、肩部が張り出している。口径は5.9cm、器高は12.2cm、底径5.5cmある。内・外面ともにナデ調整が施されている。底部にはハの字に開く高台が付けられ、高台部は方形を呈し、高台部接着後、ナデ調整されている。胎土は砂粒を含み、色調は灰黄色である。

66はE－3グリッドから出土した長頸瓶の頚部から肩部で、外面の頚部から肩部にかけて釉が塗布されている。内・外面ともにナデ調整が施されている。胎土は黒色粒を少量含み、色調は灰白色である。

67はE－3グリッドから出土した口縁部から頸部で、折り返しの口縁部をもち、口縁部の内面は自然釉が付着している。口径は推定で13.3cmある。胎土は白色粒を含み、色調は灰白色である。

68はD－3グリッドから出土した口縁部～頸部で外反し、折り返しの口縁部をもつ。口径は推定で11.9cmある。胎土は白色粒・黒色粒を含み、色調は灰白色である。

69はC－3グリッドから出土した口縁部で、折り返しの口縁部をもつ。内面に自然釉が付着している。口径は推定で7.5cmある。内・外面ともにナデ調整が施されている。胎土は黒色粒を含み、色調は灰白色である。

3）浄瓶

70はD－3グリッドから出土した浄瓶の先端部で、外面上部に釉が付着している。上半部内面に半時計回りのしぼり痕が残っている。胎土は精製で、色調は灰白色である。以後71,72は同一個体と思われる。

71はD－3グリッドから出土した浄瓶の注口部で、上半部に釉が付着している。内・外面ともにナデ調整が施されている。胎土は黒色粒を微量に含み、色調は灰白色である。

72はE－3グリッドから出土した底部で、高台が付いている。外面に多量の釉が付着し、内面にも少量の釉が付着している。底径は8cmある。高台を付けた後、丁寧にナデ調整が施されている。胎土は黒色粒を少量含む。色調は灰白色である。

4）その他

73はD－3グリッドから出土した肩部で、緩やかに張り出した肩部をもち、外面に釉が塗布されている。内面はナデ調整が施されている。胎土は黒色粒を少量含み、色調は灰白色である。

74はE－4グリッドから出土した平瓶の把手部の破片で、上面に釉が付着している。内面、屈曲部に指頭痕が残っている。胎土は黒色粒を微量に含み、色調は灰白色である。

75はB－3グリッドから出土した体部下半から底部で、底部には高台が付けられている。体部下半から底部にかけて厚さが0.7～0.9cmと肥厚している。胎土は白色粒・黒色粒を含み、色調は灰白色である。

②須恵器（第26図）

76はD－2グリッドから出土した甕の胴部の破片である。外面はタタキ目、内面は青海

紋が見られる。胎土は砂粒を少量含み、色調は灰色である。

77はD－3グリッドから出土した蓋で、口縁部をやや四角く収めている。天井部は欠損している。口径は推定で18.4cmある。外面上部にヘラ削りが施されている。胎土は白色粒・黒色粒を微量に含み、色調はオリーブ灰色である。

78はF－3グリッドから出土した蓋で、口縁部付近で内側に屈曲させている。口径は推定で17.6cmある。内・外面ともナデ調整が施されている。胎土は白色粒を微量に含み、色調は灰黄色である。

③土師質土器（第27図）

79はB－3グリッドから出土した皿の口縁部から底部で、短く立ち上っている。口径は推定で15.2cm、器高は推定で2.0cm、底径は推定で10.4cmある。内・外面ともナデ調整が施されている。胎土は砂粒を微量に含み、色調は灰黄色である。

80はD－3グリッドから出土した坏の口縁部から底部で、口縁部でやや肥厚している。口径は推定で11.0㎝、器高は推定で2.6㎝、底径は推定で6.1㎝ある。内・外面とも磨滅が激しく調整方法は不明である。胎土は白・赤色粒を含み、色調は橙色である。

81はF－3グリッドから出土した坏の身で、平底の底部からほぼ直線的に開いて立ち上がっている。底部の外面にヘラ記号が見られる。内・外面に丹塗りされている。口径は推定で12.3cm、器高は推定で3.7cm、底径は推定で8.0cmある。内・外面ともナデ調整が施されている。胎土は金雲母、赤色粒を含み、色調はにぶい橙色である。

82はD－3グリッドから出土した高台付碗の口縁部から底部で、底部から緩やかに内彎しながら立ち上がっている。口径は推定で13.7cm、器高は推定で4.6cm、高台径は推定で6.7cmある。内・外面とも剥落が激しく調整方法は不明である。胎土は白・赤色粒を含み、色調は橙色である。

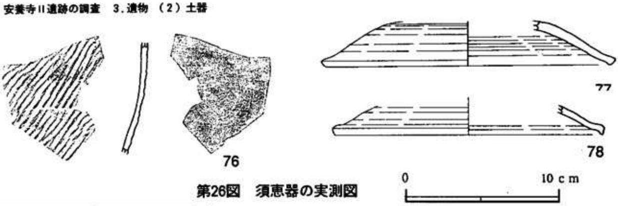
83はD－2グリッドから出土した高台付碗の底部で、器壁は薄い。高台径は推定で7.4cmある。内・外面とも剥落が激しく調整方法は不明である。胎土は白・赤色粒を含む。色調はにぶい橙色である。

84はD－3グリッドから出土した碗の口縁部から底部で、平底の底部から緩やかに内彎しながら立ち上がる。内面は黒色化している。口径は推定で13.0cm、器高は推定で3.1cm、底径は推定で6.4cmある。内外面とも剥落していて、調整方法は不明である。胎土は砂粒を微量含み、色調は暗灰黄色である。

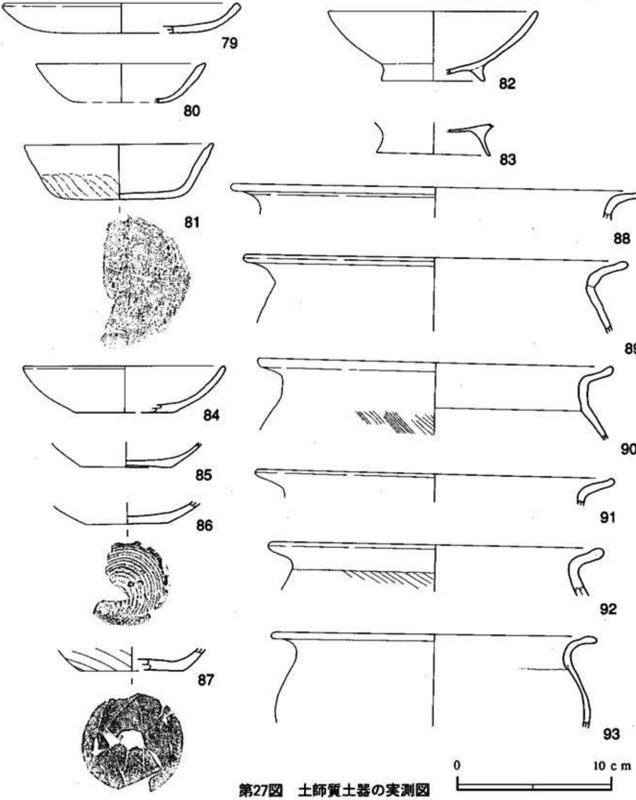
85はD－3グリッドから出土した碗の体部から底部で、底部は平底である。底径は推定で5.8cmある。内・外面とも剥落しており調整方法は不明である。底部に回転糸切痕が見られる。胎土は白・赤色粒を含み、色調は橙色である。

86はC－3グリッドから出土した碗の平底の底部で、底部外面に墨書が施されているが、文字の判別は不明である。底径は推定で5.4cmある。底部に回転糸切痕が施されている。胎土は金雲母、黒・赤色粒を含み、色調はにぶい橙色である。

87はD－3グリッドから出土した碗の体部下半から底部で、底部は平底である。底径は



第26図　須恵器の実測図



第27図　土師質土器の実測図

6.7cmある。外面にヘラ調整痕が見られる。胎土は赤色粒、金雲母、砂粒を含み、色調はにぶい黄橙色である。

88はF－4グリッドから出土した甕の口縁部で、口縁部は外反し、口唇部は上方へ肥厚している。口径は推定で26.8cmある。外面はナデ調整が施され、内面は剥落している。胎土は砂粒、赤色粒、金雲母を含み、色調はにぶい黄橙色である。

89はE－4グリッドから出土した甕の口縁部で、口唇部内側がやや肥厚している。口径は推定で25.0cmある。内・外面ともほぼ全体的に剥落しており、調整方法は不明である。胎土は砂粒、赤色粒、雲母を含み、色調はにぶい橙色である。

90はD－3グリッドから出土した甕の口縁部で、口縁部は外反している。口径は推定で23.3cmある。胴部外面に斜位のハケ目、口縁部はナデ調整が施されている。内面は剥落している。胎土は砂粒、赤色粒、金雲母を含み、色調は橙色である。

91はB－3グリッドから出土した甕の口縁部で、口縁部は外反し、口唇部内面はやや肥厚している。口径は推定で23.5cmある。内・外面とも剥落しており、調整方法は不明である。胎土は砂粒、赤色粒、金雲母を含み、色調はにぶい黄橙色である。

92はE－3グリッドから出土した甕の口縁部で、口縁部は外反し、器厚は厚手である。口径は推定で21.6cmある。外面は体部に斜位のハケ目が見られ、内面は剥落している。胎土は金雲母、赤色粒を含み、色調は浅黄色である。

93はB－3グリッドから出土した甕の口縁部で、口縁部は外反している。口径は推定で10.6cmある。内・外面ともほぼ全体的に剥落しており、調整方法は不明である。胎土は砂粒、赤色粒を含み、色調は灰白色である。

（3）遺物観察表

①石器計測表

（）は残存部の値

図中番号	遺物番号	出土地点	種類	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
1	361	C2	石鏃	凝灰岩	2.3	1.3	0.3	0.69	
2	365	D3	石鏃	凝灰岩	1.8	1.5	0.3	0.89	
3	276	F3	石鏃	玄武岩	1.9	1.2	0.4	(0.55)	右脚欠損
4	398	E3	石鏃	砂岩	2.0	1.7	0.4	0.63	
5	408	E4	石鏃	黒曜石	(2.3)	(2.0)	0.5	(0.47)	先端部欠損
6	410	E3	石鏃	石灰岩	1.7	(1.4)	0.2	(0.18)	左脚欠損
7	332	D3	石鏃	シルト岩	2.5	(1.6)	0.3	(0.73)	左脚欠損
8	362	C2	石鏃	砂岩	2.7	1.9	0.7	2.98	
9	40	F3	スクレイパー	石灰岩	2.2	1.9	0.8	2.74	未完成
10	399	C3	石匙	玄武岩	5.2	3.9	0.9	19.01	
11	400	E4	石匙	泥岩	4.4	4.1	0.6	13.40	
12	407	F3	石匙	石灰岩	5.4	2.7	0.6	10.43	
13	84	F3	加工痕剥片	凝灰岩	7.1	4.5	1.5	30.15	
14	184	B2	加工痕剥片	石灰岩	8.9	8.5	2.7	173.86	
15	285	C3	加工痕剥片	安山岩	3.8	2.7	1.1	5.69	
16	369	E3	加工痕剥片	安山岩	6.3	3.4	1.5	17.74	
17	372	E3	加工痕剥片	玄武岩	8.6	5.1	1.3	52.07	
18	413	D3	加工痕剥片	チャート	5.0	5.5	1.4	39.81	
19	412	E4	加工痕剥片	泥岩	6.6	3.9	1.1	28.34	
20	414	F3	加工痕剥片	黒色安山岩	8.1	3.9	1.2	34.10	
21	411	E3	加工痕剥片	泥岩	7.3	5.6	3.2	165.18	
22	416	D4	加工痕剥片	泥岩	7.8	5.8	4.5	170.30	
23	240	F3	打製石斧	安山岩	8.9	4.9	1.6	84.33	
24	415	E4	打製石斧	砂岩	(14.7)	9.4	2.7	(533.36)	
25	360	F3	石核	砂岩	7.8	6.2	6.1	281.85	
26	428	F3	石核？	カンラン石玄武岩	6.9	6.2	4.6	245.96	

②土器観察表

図中番号	遺物番号	出土地点	種別 器種	法量（cm） 口径 器高 底径（高台径）	形態	製作技法	胎土	焼成	色調	部位
27	373	F4	縄文土器	－ － －	口縁部は外反している。	内・外面とも磨滅が著しいが、外面には横方向の条痕文状圧痕が見られる。	砂粒がやや多く、白色粒を含む。	良	橙色 7.5YR	口縁部
28	388	E3	縄文土器 甕	－ － －		内・外面とも磨滅が著しいが、外面には斜方向の条痕文状圧痕が見られる。	砂粒、白色粒を含む。	良	橙色 7.5YR	体部
29	319	C3	縄文土器	－ － －		外面に条痕文状の圧痕が見られる。	砂粒、赤色粒を含む。	良	にぶい黄橙色 10YR	体部
30	299	B3	弥生土器	－ － －	胴部に隆帯をもつ。	内・外面とも剥落部分が目立つ。	砂粒やや多く、石英、金雲母を含む。	やや良	橙色 7.5YR	口縁部
31	188	B3	弥生土器 甕	－ － 9.0	平底の底部で厚手。	内・外面とも磨滅が激しく不明。	砂粒、白・赤色粒を含む。	良	にぶい黄橙色 10YR	底部
32	34	E4	灰釉陶器 碗	－ － (5.8)	高台の断面形状は台形。内面にわずかに釉が付着する。	底部はヘラ削りした後、高台部をナデ付けている。内・外面ともにナデ調整 内面に指頭痕が残る。	白色粒を含む。	良	灰白色 5Y	底部
33	158	C3	灰釉陶器 碗	－ － (6.8)	高台部の断面形状は台形を呈している。	底部は回転糸切後、高台をナデ付けている。	白色粒・黒色粒を微量含む。	良	灰白色 2.5Y	底部
34	159	C3	灰釉陶器 小碗	－ － (4.6)	高台の断面形状は台形。	高台は底部を厚くヘラ削りした後、高台を引き出している。	白色粒を含む。	良	灰白色 5Y	底部
35	421	C3	灰釉陶器 碗	－ － 6.8	高台部の断面形状は台形？を呈している内面に自然釉が付着。	底部は回転糸切後、高台部をナデ付けている。	黒色粒を含む。	良	灰黄色 7.5Y	底部
36	153 155	B3 B4	灰釉陶器 碗	(19.0) － 7.6	胴部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がる。高台の断面形状は三日月形を呈している。口縁部内面下に沈線あり。	底部は回転糸切後高台をナデ付けている。内・外面ともナデ調整。	白色粒を微量含む。	良	灰白色 2.5Y	完形品
37	60	B3	灰釉陶器 碗	－ － 7.6	高台部の断面形状は三角形を呈している。	底部はヘラ削り後、高台をナデ付け、内・外面はナデ調整。	白色粒・砂粒を微量含む。	良	灰白色 2.5Y	底部
38	67	C3	灰釉陶器 碗	－ － 6.4	高台部の断面形状は三角形を呈している。	底部は回転糸切後、高台をナデ付けている。	黒色粒を少量含む。	良	灰白色 2.5Y	底部
39	69	F3	灰釉陶器 碗	－ － (7.4)	高台の断面形状は三日月形。	底部はヘラ削りした後、高台部をナデ付けている。外面下半部はヘラ削り。	白色粒を含む。	良	灰色 7.5Y	底部
40	75	E3	灰釉陶器 碗	－ － (6.0)	高台付底部で、断面形状は鈍い三角形を呈している。	内・外面ともナデ調整で、底部は回転糸切後高台部をナデ付けている。	黒色粒を含む。	良	灰黄色 2.5Y	底部の破片
41	87、93 111	D3	灰釉陶器 碗	－ － (6.5)	高台付の底部で、断面形状は爪形状を呈している。内面の一部自然釉が付着している。	内・外面ともナデ調整。底部は、碗の底部作成後粘土版を接合し、もう一度糸切後高台部を接合している。？	砂粒、黒色粒を含む。	良	灰白色 5Y	底部
42	134	D2	灰釉陶器 碗	－ － (6.2)	高台の断面形状は三日月形。体部は緩やかに内湾して立ち上がる。内側に釉が付着。	底部はヘラ削りした後、高台部をナデ付けている。体部外面はヘラ削り、内面はナデ調整。	白色粒を含む。	良	灰白色 7.5Y	底部
43	162	C3	灰釉陶器 碗	－ － 8.2	高台を付けている。	内・外面ともナデ調整。高台部はナデ付けている。	白色粒を少量含む。	良	灰色 7.5Y	底部
44	3	E4	灰釉陶器 碗	－ － (7.0)	高台付の底部で、断面形状は台形を呈している。	内・外面ともナデ調整。	砂粒、黒色粒を含む。	良	灰白色 5Y	底部
45	20 80	E3 E4	灰釉陶器 碗	－ － 7.2	高台部の断面形状は三角形を呈している。	底部はヘラ削り後、高台をナデ付けている。	砂粒を含む。	良	灰白色 5Y	底部
46	62	C3	灰釉陶器 碗	－ － 6.9	高台の断面形状は三角形。	底部は回転糸切り後、高台部をナデ付けている。内・外面ともナデ調整。	黒・白色粒を含む	良	灰白色 5Y	底部
47	71	F3	灰釉陶器 碗	－ － (6.2)	高台の断面形状は三角形。内面に釉が残る。	底部はヘラ削りした後、高台部をナデ付けている。内・外面ともにナデ調整	白色粒を含む。	良	灰色 7.5Y	底部
48	77 122	E4	灰釉陶器 碗	－ － 6.2	高台付の底部で、断面形状は三角形を呈している。底部内面に自然釉が付着している。	内・外面ともナデ調整で、底部は回転糸切後高台部をナデ付けている。	黒・白色粒を含む。	良	灰白色 5Y	底部
49	94	D3	灰釉陶器 碗	－ － (6.9)	高台付の底部で、断面形状は三角形を呈している。底部に多く自然釉が付着している。	内・外面ともナデ調整で、底部は回転糸切後高台部をナデ付けている。	黒色粒を少量含む。	良	灰白色 N	底部
50	105	D3	灰釉陶器 碗	－ － (7.8)	高台の断面形状は三角形。	底部はヘラ削りした後、高台部をナデ付けている。体部外面下半部はナデ調整。	白色粒を含む。	良	灰色 5Y	底部
51	161	C3	灰釉陶器 碗	－ － 5.9	高台付の底部で、断面形状は三角形を呈している。	内・外面ともナデ調整で、底部は回転ヘラ削り後高台部をナデ付けている。	砂粒、白色粒を含む。	良	灰色 7.5Y	底部
52	283	C3	灰釉陶器 碗	－ － (7.2)	高台の断面形状は三角形。体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部付近で外に引き出されていると思われる。	底部は磨滅して不明。高台はナデ付けられている。内・外面ともにナデ調整	白色粒を含む。	良	淡黄色 5Y	底部

図中番号	遺物番号	出土地点	種別 器種	法量（cm） 口径 器高 底径（高台径）	形態	製作技法	胎土	焼成	色調	部位
53	418	C3	灰釉陶器 小碗	－ － (5.4)	高台付の底部で、断面形状は三角形を呈している。底部内面に自然釉が付着している。	底部は切り離した後高台部を丁寧にナデ付けている。	黒・白色粒を含む。	良	灰白色 5Y	底部
54	419	C3	灰釉陶器 碗	－ － (6.9)	高台付の底部で、断面形状は三角形を呈している。	内・外面ともナデ調整。	砂粒を含む。	良	灰黄色 2.5Y	底部
55	420	C3	灰釉陶器 碗	－ － (6.8)	高台付の底部で、断面形状は三角形を呈している。	底部は回転糸切後高台部をナデ付けている。	砂粒を含む。	良	灰白色 5Y	底部
56	422	C3	灰釉陶器 碗	－ － －	高台付の底部で、断面形状は低い三角形を呈している。内面に自然釉が付着している。	内・外面ともナデ調整で、底部は回転糸切後高台部をナデ付けている。	砂粒を含む。	良	灰黄色 2.5Y	底部
57	163	C4	灰釉陶器 碗	－ － 5.9	高台の断面形状は台形を呈している。	底部は回転糸切後、高台部をナデ付けている。	白色粒を含み、黒色粒を微量含む。	良	灰白色 5Y	底部
58	95	D3	灰釉陶器 碗	－ － 5.6	高台部の断面形状は三日月形を呈している。	底部はヘラ削り後、高台をナデ付けている。	黒色粒をやや多く含む。	良	浅黄色 2.5Y	底部
59	76、99、 118168	E3	灰釉陶器 碗	－ － (6.6)	高台付底部で、断面形状は三角形。底部と高台部の接着部分が破損している。	内・外面ともナデ調整で、底部は回転糸切後高台部をナデ付けている。	砂粒を含む。	良	暗青灰色 5BG	体部～底部
60	68	C3	灰釉陶器 碗	－ － －	高台部は高く、内・外面に釉が付着している。	底部は一部ヘラ削り後、高台部をナデ付けている。	白色粒を含む。	良	灰色 N	底部
61	423	C3	灰釉陶器 碗	－ － (8.8)	高台部は細く高い。	高台をナデ付けている。	白色粒を含む。	良	灰白色 2.5Y	底部
62	87	E3	灰釉陶器 碗	－ － (6.2)	高台の断面形状は弓形。接地部は面取りされている。	底部はヘラ削りした後、高台部をナデ付けている。内・外面ともに丁寧なナデ調整。	精製	良	灰白色 5Y	底部
63	417	E3	灰釉陶器 墨書碗	(15.4) － －	緩やかに内彎する体部から口唇部を僅かに外に引き出している。判読不明の文字が書かれている。	上半部はナデ調整、下半部はヘラ削り	砂、黒・白色粒を含む。	良	灰白色 5Y	口縁部～体部
64	146	B3	灰釉陶器 碗	(13.8) － －	口唇部付近でわずかに外反する。	内・外面ともナデ調整。	白・赤色粒を含む。	良	にぶい赤褐色 5YR	口縁部
65	286	C3	灰釉陶器 小型の長頸瓶	5.9 12.2 5.5	高台付の底部から立ち上がり、胴部上方に最大径を持つ。頸部から外反して口縁部で折り返している。	内・外面ともナデ調整。底部は高台部付着後ナデ調整されている。	砂粒を含む。	良	灰黄色 2.5Y	完形
66	50	E3	灰釉陶器 長頸瓶	－ － －	外面の肩部に釉が付着。	内・外面ともナデ調整。	黒色粒を少量含む。	良	灰白色 5Y	頸部～肩部
67	170	D3	灰釉陶器 壺	(11.9) － －	折り返し口縁部をもつ。		白色粒・黒色粒を含む。	良	灰白色 2.5Y	口縁部～頸部
68	426	C3	灰釉陶器 壺	(7.5) － －	折り返し口縁部をもつ。内面に自然釉が付着している。	内・外面ともナデ調整。	黒色粒を含む。	良	灰白色 2.5Y	口縁部
69	78	E3	灰釉陶器 壺	(13.3) － －	折り返し口縁部をもち、口縁部内面は施釉されている。		白色粒を含む。	良	灰白色 7.5Y	口縁部～頸部
70	117 273	D3	灰釉陶器 浄瓶	－ － －	外面上部に釉が付着。	上半部内面に半時計回りのひねり痕。	精製	良	灰白色 2.5Y	先端部
71	265 268	D3	灰釉陶器 浄瓶	－ － －	上半部に釉が付着。	内・外面ともナデ調整。	黒色粒を微量含む。	良	灰白色 2.5Y	注口部
72	260	E3	灰釉陶器 浄瓶	－ － 8.0	高台付の底部。外面に多量の釉が付着し、内面には少量の釉が付着。	高台を付けた後、丁寧にナデ調整。	黒色粒を少量含む。	良	灰白色 2.5Y	底部
73	217、218 219、266	D3	灰釉陶器 壺	－ － －	緩やかに張り出した肩部をもつ。肩部外面に全面に釉が塗布されていたと思われる。	内面はナデ調整。	黒色粒を少量含む。	良	灰白色 7.5Y	肩部
74	427	E4	灰釉陶器 平瓶	－ － －	上面に釉が付着している。	内面、底面部に指頭痕が残っている。	黒色粒を微量含む。	良	灰白色 7.5Y	把手部の破片
75	424	B3	灰釉陶器 甕	－ － －	高台付底部。	胴部下半～底部にかけて厚さが0.7～0.9cmと肥厚している。	白色粒・黒色粒を含む。	良	灰白色 10YR	底部
76	137	D2	須恵器 甕	－ － －		外面はタタキ目、内面は青海文が見られる。	砂粒を少量含む。	良	灰色 N	胴部の破片
77	223	D3	須恵器 蓋	(18.4) － －	口縁部をやや内角収めている。天井部？は欠損している。	外面上部にヘラ削り。	白色粒・黒色粒を微量含む。	良	オリーブ灰色 2.5GY	蓋
78	85	F3	須恵器 蓋	(17.6) － －	口縁部付近で内側に屈曲させている。	内・外面ともナデ調整。	白色粒を微量含む。	良	灰黄色 2.5Y	蓋？

図中番号	遺物番号	出土地点	種別 器種	法量（cm） 口径 器高 底径（高台径）	形態	製作技法	胎土	焼成	色調	部位
79	182	B3	土師器 皿	(15.2) (2.0) (10.4)	口唇部内側に溝をもつ。	内・外面ともナデ調整。	砂粒を微量含む。	良	灰黄色 2.5Y	口縁部～底部
80	90	D3	土師器 坏	(11.0) (2.6) (6.1)	口縁部でやや肥厚している。	内・外面とも磨滅が激しく不明。	白・赤色粒を含む。	良	橙色 7.5YR	口縁部～底部
81	233 234	F3	土師器 坏	(12.3) (3.7) (8.0)	平底の底部からほぼ直線的に開いて立ち上がる。底部外面にはヘラ記号が見られる。内・外面に朱を塗布している。	内・外面ともナデ調整。	金雲母、赤色粒を含む。	良	にぶい橙色 7.5YR	身
82	279	D3	土師器 椀	(13.7) (4.6) (6.7)	高台付の底部から緩やかに内彎しながら立ち上がる。	内・外面とも磨滅が激しく不明。	赤色粒を含む。	良	橙色 7.5YR	底部
83	131	D2	土師器 椀	－ － (7.4)	高台付の底部で、器壁は薄い。	内・外面とも磨滅が激しく不明。	白・赤色粒を含む。	良	にぶい橙色 7.5YR	底部
84	274	D3	土師器 椀	(13.0) (3.1) (6.4)	平底の底部から緩やかに内彎しながら立ち上がる。内面は黒色化している。	内面は剥離しており、外面は磨滅している。	砂粒を微量含む。	良	明灰黄色 2.5Y	口縁部～底部
85	261	D3	土師器 椀	－ － (5.8)	平底の底部。	内・外面とも磨滅が激しく不明。底部に回転糸切痕が見られる。	白・赤色粒を含む。	良	橙色 7.5YR	体部～底部
86	157	C3	土師器 椀	－ － (5.4)	平底の底部。	底部に回転糸切痕。	金雲母、黒・赤色粒を含む。	良	にぶい橙色 5YR	底部
87	225	D3	土師器 椀	－ － 6.7	平底の底部。	外面にヘラ調整痕あり。	赤色粒、金雲母、砂粒を含む。	良	にぶい黄橙色 10YR	胴下半～底部
88	195	F4	土師器 甕	(26.8) － －	口縁部は外反し、口唇部は上方へ肥厚している。	外面はナデ調整、内面は磨滅している	砂粒、赤色粒、金雲母を含む。	良	にぶい黄橙色 10YR	口縁部
89	29	E4	土師器 甕	(25.0) － －	口唇部内側がやや肥厚している。	内・外面ともほぼ全体的に剥離している。	砂粒、赤色粒、雲母を含む。	良	にぶい橙色 7.5ＹR	口縁部
90	267	D3	土師器 甕	(23.3) － －	口縁部は外反している。	胴部外面にハケ目、口縁部はナデ調整内面は磨滅。	砂粒、赤色粒、金雲母を含む。	良	橙色 5YR	口縁部
91	147	B3	土師器 甕	(23.5) － －	口縁部は外反し、口唇部内面はやや肥厚している。	内・外面とも磨滅している。	砂粒、赤色粒、金雲母を含む。	良	にぶい黄橙色 10YR	口縁部
92	16	E3	土師器 甕	(21.6) － －	口縁部は外反し、器厚は厚手。	外面は胴部に斜方向のハケ目。内面は磨滅している。	金雲母、赤色粒を含む。	良	浅黄色 2.5Y	口縁部
93	173	B3	土師器 甕	(10.6) － －	口縁部は外反している。	内・外面ともほぼ全体的に剥離している。	砂粒、赤色粒を含む。	良	灰白色 2.5Ｙ	口縁部

4.まとめ

本地点での調査では、土坑3基、焼土跡4カ所を確認した。遺構に伴って出土した遺物は乏しく、また埋没谷という性格上、遺構の覆土内から出土した遺物も上部からの落ち込みの可能性も否定できない。第1号土坑の覆土内から条痕紋土器片が出土し、また焼土跡に関しても、周辺から灰釉陶器が出土しているが、第1号土坑と同様に明確な時代判定の根拠とは成り得ず、本地点で確認した遺構と遺物は必ずしも結び付くとは言えない。

本地点の性格を考えるための資料は、原地形の復元と、遺物、周辺の遺跡との関連である。

原地形から見ると、本地点の北側は最高点80.8mで調査区域より約5m程高くなり、そのまま北東方向に向かって緩やかに続いている。北東方向には安養寺遺跡があり、本地点との相互関係を無視することはできない。

本地点で出土した遺物は、石鏃・スクレイパー等の石器と縄文土器からなる縄文時代の遺物と、灰釉陶器を中心とする平安時代の遺物に分けられる。出土した遺物の特徴の一つとして「少数多種」ということが挙げられる。

石器全体を見ると、製品としての総点数は24点であるが、器種としては石鏃・スクレイパー・石匙・剥片石器・打製石斧の5種と石核が出土しており、石鏃は出土点数が8点と少ないが、分類すると4種類に分けられる。石材に関してもシルト岩・チャート・石灰岩・泥岩・粘板岩・凝灰岩・玄武岩・黒曜石・砂岩・安山岩・カンラン石玄武岩（溶岩）と11種類が使用され、その他に、石英・緑色凝灰岩などの破片や、比較的大きな砂岩質の円礫、角礫が含まれている。さらに埋没谷内から、出土位置に差はあるものの、チップが集中する地点が2ヶ所ある。

以上のことから石器に関して言えることは、「石器製作場」が周辺にあったということ、静岡県東部しか見られない緑色凝灰岩、富士山周辺と思われる溶岩製の石核、天竜川上流産の石英等周辺では見られない石材が出土していることから、その当時の流通の広さを知ることができる。

石器のうち、石鏃はその特徴から縄文時代中期から後期のものと考えられる。

土器は縄文土器、弥生土器、土師質土器、須恵器、灰釉陶器が出土したが中心は灰釉陶器である。

縄文土器と弥生土器は出土点数が少なく、破片のみで断定はできない。

灰釉陶器は碗・小碗・皿の底部などの特徴や焼成の状況から平安時代初期から平安時代後期までが含まれていると考えられる。なお出土例の少ない浄瓶の出土が特に注目される。

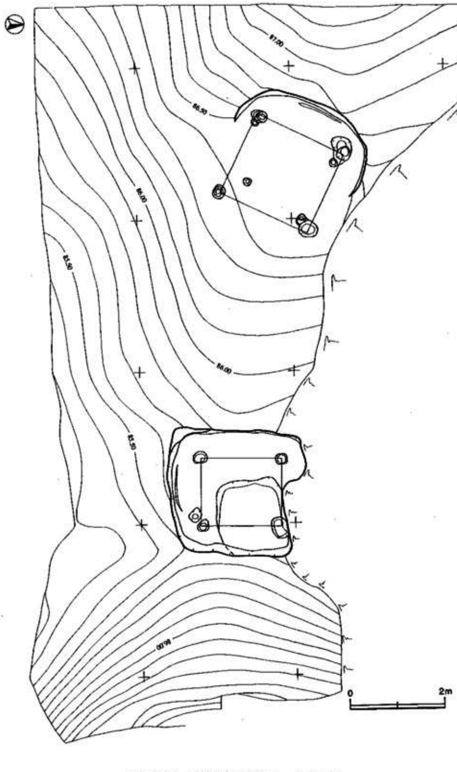
本地点東側で昭和63年に調査された安養寺遺跡において弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡と11世紀代に営まれた寺院跡が発見されている。本地点から出土した遺物、特に浄瓶の出土は、安養寺に関連する遺物であると考えられる。また、出土した遺物の時代は、本地点周辺の遺跡と関連させて考えることが、本地点のみならず安養寺周辺の遺跡の全体像を解明する鍵であり、今後の課題といえる。

参考文献

・鈴木道之　1981「図録　石器の基礎知識Ⅲ」 柏書房
・静岡県文化財保存協会　1981「静岡県の中世城館跡」
・三島市教育委員会　1994「五輪・観音洞・元山中・陰洞遺跡Ⅰ」
・山田成洋・大石　泉　1988「内荒遺跡（遺物編）」 静岡県埋蔵文化財調査研究所
・平野吾郎・佐野五十三他　1988「梅橋北遺跡」 静岡県埋蔵文化財調査研究所
・静岡県　1992「静岡県史　資料編3」

Ⅲ　安養寺Ⅲ遺跡の調査

本地点での調査では、弥生時代後期から古墳時代前期に属すと考えられる竪穴住居跡２軒と、12世紀後半に属す山茶碗などを副葬する土壙を１基確認した（第28図参照）。周辺の地形から他にも住居跡が所在したと思われるが、後世の茶畑耕作による攪乱のため確認できなかったと思われる。以下、確認した遺構と出土した遺物の状況について述べる。



第28図　安養寺Ⅲ遺跡　全体図

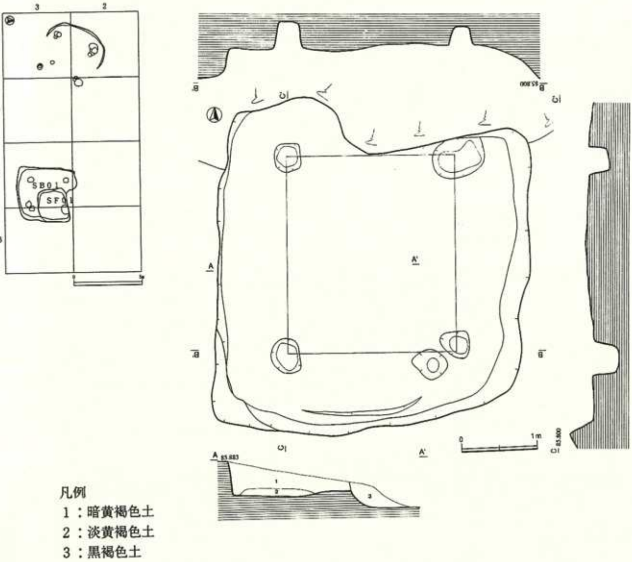
1．遺　構

調査した面積の割に少ない数であるが、竪穴住居跡が2軒と土壙が1基確認された。これらの遺構は出土した遺物から、第1号住居跡の（SB01）が古墳時代前期、同じく第2号住居跡（SB02）が弥生時代後期、土壙（SF01）が平安時代後期（12世紀後半）に帰属するものである。

（1）住居跡

1）ＳＦ０１（第29図参照）

調査区東域のＢ～Ｃ－２～３グリッドにおいて、土壙（SF01）と重なった状態で確認された。出土した土器および土層の観察からも明らかなように、土壙の方が新しいものである。住居跡の規模は、床面での計測値で南北軸が長く4ｍ20㎝、東西軸で3ｍ60㎝を測る。平面形は隅丸方形で、南側壁際の一部において幅20㎝の壁溝が確認された。床面は、叩きのような貼り床を確認していないが、完掘した掘り方の状況から貼り床状の整形は成されていたと思われる。住居跡の中央部に土壙が重なり、住居跡の北側の壁が消失していることから、

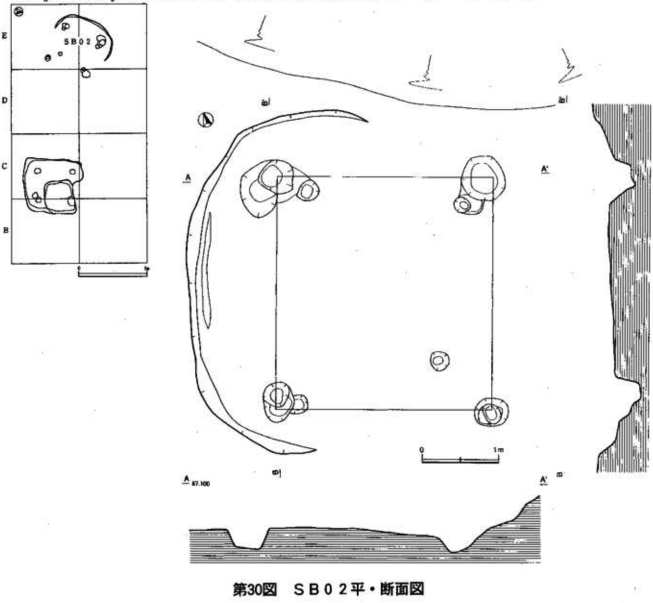


第29図　ＳＢ０１平・断面図

本住居跡の炉ないし竈の所在については不明である。出土遺物が示す時代から推測して、炉であったと考えられる。主柱穴は4つで、柱間の長さは東西長2 m 20 cm、南北2 m 60 cmを測る。なお、住居跡の南側にもう一つ浅い穴が発見されているが、これは屋根を支える柱穴でなく、入り口施設等他の目的の穴であると考えられる。住居跡の長軸方向は、N－2°－Wである。

2）ＳＢ０２（第30図参照）

調査区西域のD～E－2～3グリッドにおいて確認された。出土した土器から、弥生時代後期の住居跡と考えられる。住居跡の規模は、壁の残存する南北間の計測値が4 m 42 cmで、東側壁は欠落しているので東西間の長さは不明である。平面形状は楕円形で、西側壁際に壁溝が確認されている。覆土はほとんど残っていなかったので、床面には明瞭な状況で貼り床を確認していない。しかし、完掘掘り方の状況から床面を平坦にする必要があり、貼り床は施されていたと思われる。また炉跡は確認していないが、住居跡中央部に被焼痕が狭い範囲で確認しているので炉仕様であったと思われる。主柱穴は4つで、柱間の長さは東西長2 m 84 cm、南北長3 m 8 cmを測る。住居跡の長軸方向は、N－23°－Eである。

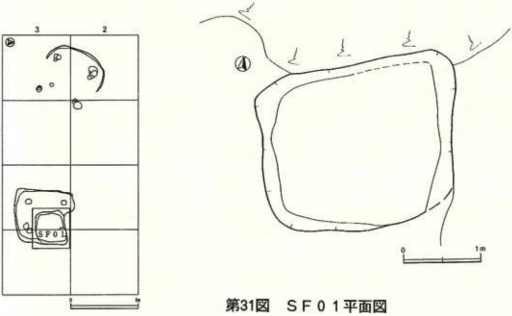


第30図　ＳＢ０２平・断面図

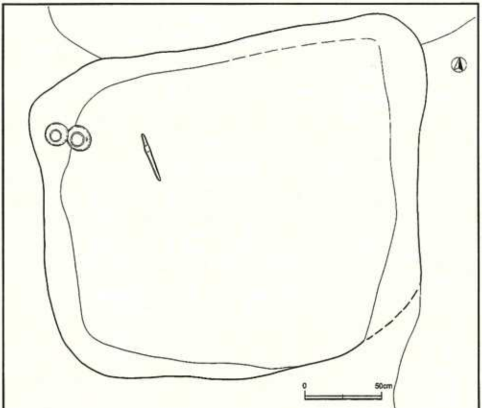
（2）土　壙

1）ＳＦ０１（第31図参照）

調査区東域のＢ～Ｃ－２～３グリッドにおいて、SBO1と重複して検出した。出土した土器の特徴から、平安時代後期（12世紀後半）の土壙である。出土遺物は、山茶碗２個と小刀１振がある（第32図参照）。土壙の平面形は隅丸方形で、床はほぼ平坦に掘り込まれている。規模は、確認面（住居跡床面）で東西２ｍ60㎝、南北２ｍ22㎝、土壙床面で東西２ｍ５㎝、南北２ｍを測る。長軸方向は、Ｎ－９°－Ｗである。



第31図　ＳＦ０１平面図



第32図　ＳＦ０１状況図

2.遺　物

安養寺Ⅲ遺跡からは土器が123点、鉄製品は1点出土した。土器は山茶碗、土師質土器が出土した（第33図参照）。

（1）土　器

1はSF01から出土した山茶碗の碗の完形で、口径は16.1ｃｍ、器高は6.2ｃｍ、高台径は8.5ｃｍある。体部は緩やかに内彎して立ち上がり、口縁部をやや外に引き出している。口縁部に輪花を4箇所認める。高台部断面は台形状を呈し、「ハ」の字に開いている。底部は高台部を接着した後丁寧にナデ調整が施されている。胎土は砂粒・黒色粒を含み、色調は灰白色である。

2はSF01から出土した山茶碗の碗の完形で、口径は16.0ｃｍ、器高は5.9ｃｍ、高台径は7.8ｃｍある。体部は緩やかに内彎して立ち上がり、口縁部をやや外に引き出している。口縁部に輪花を3箇所認める。高台部断面は三角形状を呈する。体部内面に自然釉が付着している。底部は高台部を接着した後丁寧にナデ調整が施されている。胎土は黒色粒・白色粒を含み、色調は灰白色である。

3はSB01から出土した土師質土器の碗の口縁部から底部で、口径は推定で13.8ｃｍ、器高は推定で7.4ｃｍ、底径は推定で6.5ｃｍある。平底の底部から内彎しながら立ち上がり、口唇部を平らかに収めている。外面は剥落部分が多いが、口縁部に櫛状施具による不規則な斜位の線紋がみられ、体部下半にヘラ調整が施されている。内面はやや黒色化しており、口縁部に板目が見られ、その上をナデ調整している。胎土は白色粒・黒色粒・赤色粒を含み、色調はにぶい黄橙色である。

4はSB01のC-3グリッドから出土した平底の底部の破片で、内外面とも剥落のため調整方法は不明である。胎土は茶色粒・灰色粒を含み、色調は浅黄色である。

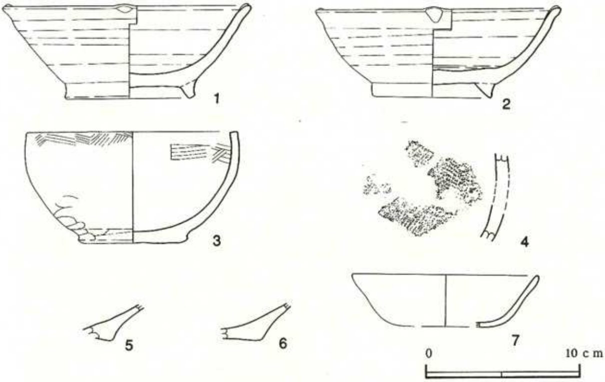
5はSB01から出土した胴部破片で、胴部は緩やかに内彎している。外面の下半部は黒色化しており、上半部には縄紋（ＬＲ型）、下半部には斜方向のハケメが見られる。内面は剥落のため調整方法は不明である。胎土は白色粒を含み、色調は明黄褐色である。

6はSB02から出土した平底の底部の破片で、内外面とも剥落のため調整方法は不明である。胎土は白色粒を含み、色調はにぶい黄橙色である。

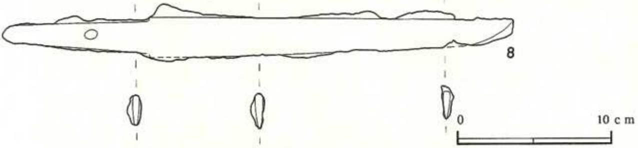
7はSP1から出土した土師質土器の坏の口縁部から底部で、口径は推定で11.0ｃｍ、器高は推定で3.4ｃｍ、底径は推定で6.2ｃｍある。平底の底部から体部はやや内彎して立ち上がる。内面には煤が付着しているが、内外面ともに剥落部分が目立つ。胎土は赤色粒・白色粒を含み、色調は橙色である。

（2）鉄製品

8はSF01から出土した鉄製品で、小刀である。平造りの丸棟の直刀で、全長33.5ｃｍ、刃長23.8ｃｍ、元幅2.5ｃｍ、先幅1.6ｃｍ、棟幅0.5ｃｍ、茎長9.7ｃｍを測る。



第33図　安養寺Ⅲ遺跡から出土した土器の実測図



第34図　安養寺Ⅲ遺跡から出土した鉄製品の実測図

（3）遺物観察表

1）土　器

図中番号	遺物番号	出土地点	種別 器種	法量（cm） 口径 器高 底径（高台径）	形態	製作技法	胎土	焼成	色調	部位
1	34 35 52	SF01	山茶碗 碗	16.1 6.2 8.5	遥部は緩やかに内彎して立ち上がり、口をやや外に引き出している。輪花4個所認める。高台部断面は台形状を呈す。	外・内面とも丁寧なナデ調整。高台部を切り離した後、高台部をなで付けている。	砂粒 黒色粒	良	灰白色 5Y	完形
2	53	SF01	山茶碗 碗	16.0 5.9 7.8	遥部は緩やかに内彎して立ち上がり、口縁部をやや外に引き出している。輪花4所認める。高台部断面は三角形状を呈す。	内・外面とも磨滅が著しいが、外面には横方向の条痕文状圧痕が見られる。	黒色粒 白色粒	良	灰白色 2.5Y	完形
3	44-48 54	SB01	土師質土器 碗	(13.8) (7.4) (6.5)	平底の底部から内彎しながら立ち上がる。内面黒色化。	外面は剥落部分が多いが、口縁部に櫛状施具による不規則な斜位の沈線紋、体部下半にヘラ調整痕あり。内面口縁部に板目が見られ、その上にナデ調整を施す。	白色粒 黒色粒 赤色粒	良	にぶい 黄橙色 10YR	口縁部～底部
4	109	SB01	土師質土器	－ － －	外面下半部は黒色化。	外面上半部に縄紋（ＬＲ）、下半部に斜位のハケ目。は横方向の条痕文状圧痕が見られる。	白色粒	良	明黄褐色 7.5YR	口縁部
5	122	SB02	土師質土器	－ － －	平底の底部。	内外面とも剥落のため調整方法は不明。	白色粒	やや良	にぶい 黄橙色 10YR	底部
6	106	SB02	土師質土器	－ － －	平底の底部。	内外面とも剥落のため調整方法は不明。	茶色粒 灰色粒	やや良	淡黄色 7.5YR	底部
7	21	SP1	土師質土器 坏	(11.0) (3.4) (6.2)	平底の底部から緩やかに内彎して立ち上がる。内面に煤が付着。	内・外面とも剥落部分が目立つ。	赤色粒 白色粒	良	橙色 7.5YR	口縁部～底部

2）鉄製品

図中番号	遺物番号	出土地点	種類	全長 (cm)	刃長 (cm)	元幅 (cm)	先幅 (cm)	棟幅 (cm)	茎長 (cm)
8	124	SF01	小刀	33.5	23.8	2.5	1.6	0.5	9.7

3．ま　と　め

先にも報告したように本地点での調査では、弥生時代後期～古墳時代前期に属す竪穴住居跡2軒と、12世紀後半に属す山茶碗を副葬した土壙を1基検出した。周辺の地形形状から、他にも住居跡が所在したと思われるが、最近の茶畑耕作により攪乱を受け、検出することができなかった。本地点東側の山間平坦地に所在した安養寺遺跡（昭和63年度掛川市教育委員会調査）では、同時期の弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡を延べ70軒前後を発見している。本遺跡で発見した住居跡の数は安養寺遺跡で発見した住居跡の比ではないが、同一時期に営まれた近接する集落同士である。具体的な機能は明らかとするのは難しいことであるが、同一遺跡群として非常に関係の深い集落跡（住居跡群と述べるべきか？）として位置づくものと考える。

また発見した土壙墓もその帰属する時代から、同じ安養寺遺跡で発見された建物群（建物の形状、配置等から11世紀代に営まれた寺院跡と考えられている）と非常に強く関係した遺構であると考える。

このように安養寺Ⅲ遺跡は、弥生時代後期から古墳時代前期と平安時代後期において、遺跡の東側に所在した安養寺遺跡を中心とした同一遺跡群として機能した遺跡であると考えられ、位置づけられるものと考える。

付載　安養寺Ⅱ遺跡の自然科学分析

Ⅰ．安養寺Ⅱ遺跡における花粉分析

1．試料

試料は横倒し状態で出土した土器（図版No.65）の口の部分および内部の堆積物、遺構（第3号土坑）覆土（第3層）の3点である。

2．方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にし、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

1）5％水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。

2）水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。

3）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。

4）水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：1濃　硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。

5）再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。

6）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとし、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。

3．結果

1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉5、草本花粉2、シダ植物胞子2形態の計9である。これらの学名と和名および粒数を表1に示す。主要な分類群を写真に示す。以下に出現した分類群を示す。

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、スギ、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属

〔草本花粉〕

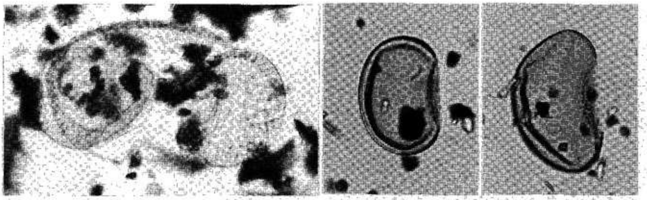
イネ科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

表1　出現した分類群

分類群		土器		第3号土坑
学名	和名	口の部分	内部	覆土
Arboreal pollen	樹木花粉			
Pinus subgen.Diploxylon	マツ属複維管束亜属			1
Cryptomeria japonica	スギ	1		
Alnus	ハンノキ属	1		
Quercus subgen.Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属		1	
Quercus subgen.Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	2		
Nonarboreal pollen	草本花粉			
Gramineae	イネ科	1	1	
Artemisia	ヨモギ属		1	1
Fern spore	シダ植物胞子			
Monolate type spore	単条溝胞子	31	8	1
Trilate type spore	三条溝胞子		1	
Arboreal pollen	樹木花粉	4	1	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	1	2	1
Total pollen	花粉総数	5	3	2
Unknown pollen	未同定花粉	0	0	0
Fern spore	シダ植物胞子	31	9	1



1　マツ属複維管束亜属　　2　シダ植物単条溝胞子　　3　シダ植物単条溝胞子
45μm

写真1　花粉・胞子遺体

2）出現傾向

土器の口の部分および内部の堆積物からはわずかに花粉・胞子が検出された。花粉は上記した分類群が出現するものの少なく傾向がわからない。なお、シダ植物単条溝胞子はやや多い。遺構覆土は花粉・胞子が極めて少ない。

4．花粉分析から推定される植生と環境

花粉・胞子が少ないため詳細な植生と環境はわからないが、土器（10世紀）の口の部分および内部の堆積物からシダ植物単条溝胞子が出現しているため、周囲にシダ植物が生育しやや乾燥した環境であったと推定される。

参考文献

中村　純　（1973）花粉分析．古今書院，p.82-110.
金原正明　（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料　研究の

方法，角川書店，p.248-262.
島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5　集，60p.
中村　純　（1980）日本産花粉の標徵．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

Ⅱ．安養寺Ⅱ遺跡における種実の同定

1．試料

試料は遺構覆土（第3層）の堆積物である。

2．方法

試料（堆積物）500ccを1.25㎜篩で水洗選別を行い、残渣を双眼実体顕微鏡で観察した。

3．結果と考察

遺構覆土（第3層）の堆積物からは種実が検出されなかった。したがって、植生や農耕の有無は不明である。なお、写真に示したように、炭化物がやや多くみられる。これらは人の活動によって生成された炭化物とみられる。

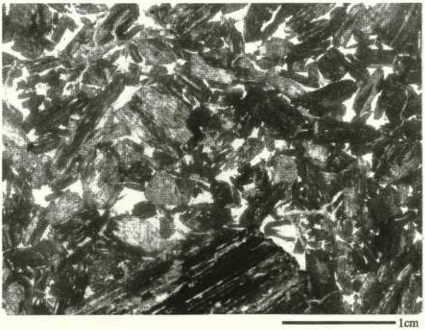


写真2　安養寺II遺跡の炭化物

参考文献

南木睦彦（1993）葉・果実・種子．日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京　大学出版会，p.276-283.

Ⅲ．安養寺Ⅱ遺跡における植物珪酸体分析

1．試料

試料は10世紀とされる土器の内部土壌（試料1、2）および平安時代と見られる遺構の覆土（試料3）と焼土（試料4）の4点である。

2．方法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

1）試料の絶乾（105℃・24時間）

2）試料約1gを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40μm・約0.02g）

※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量

3）電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理

4）超音波による分散（300W・42KHz・10分間）

5）沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥

6）封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成

7）検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

3．分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表2および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

表2　安養寺II遺跡の植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群 ＼ 試料	1	2	3	4
イネ科				
イネ		7		8
キビ族型	15			
ヨシ属		7		
ススキ属型		15		
ウシクサ族	30	223	15	30
タケ亜科				
ネザサ節型	8	82	23	23
クマザサ属型	8			
未分類等	15	89	46	53
その他のイネ科				
棒状珪酸体	38	476	31	30
未分類等	106	536	69	113
樹木起源				
ブナ科(シイ属)	23	60	46	60
ブナ科(アカガシ亜属?)	8	7		
クスノキ科(バリバリノキ?)	8	7	23	8
その他	23	15	15	8
植物珪酸体総数	279	1526	269	331

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

イネ		0.22		0.22
ヨシ属		0.47		
ススキ属型		0.18		
ネザサ節型	0.04	0.39	0.11	0.11
クマザサ属型	0.06			

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

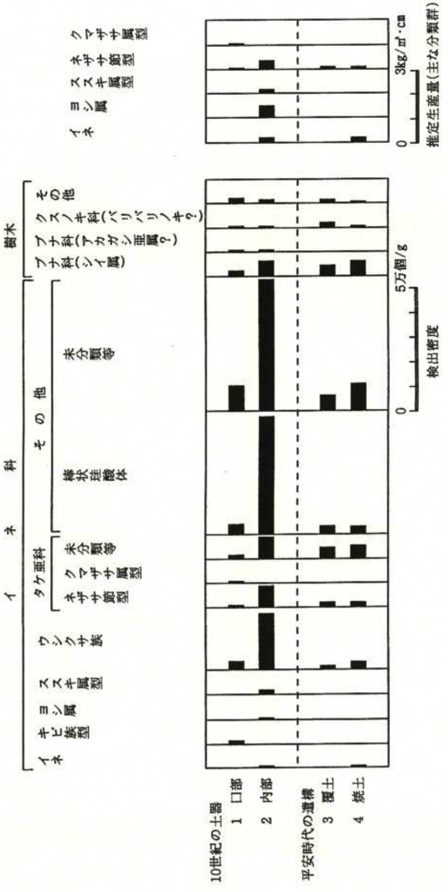
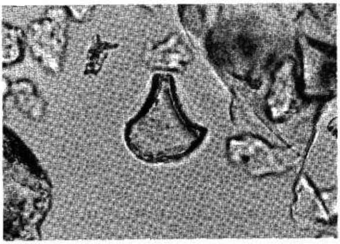
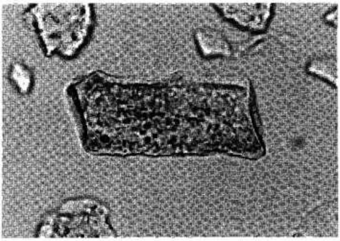
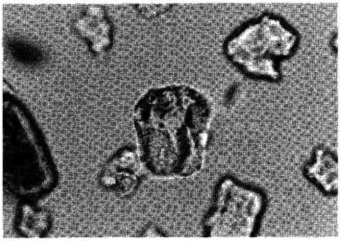
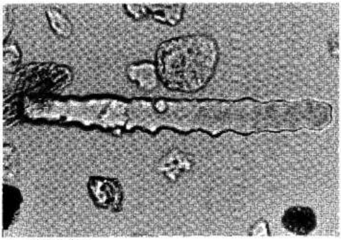


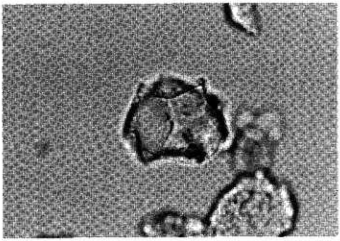
図1　安養寺II遺跡の植物珪酸体分析結果


1．イネ


2．キビ族型


3．ネザサ節型


4．棒状珪酸体


5．ブナ科（シイ属）

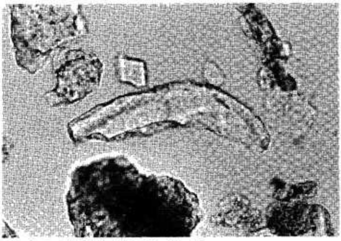

6．クスノキ科（バリバリノキ？）

写真3　植物珪酸体の顕微鏡写真（倍率：400倍）

〔イネ科〕

機動細胞由来：イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（ススキ属など）、ウシクサ族、ネザサ節　型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（おもにクマザサ属）、タケ亜科（未分類等）

その他：棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属）、ブナ科（アカガシ亜属？）、クスノキ科（バリバリノキ？）、その他

4．植物珪酸体分析から推定される植生・環境

（1）10世紀とされる土器の内部土壌

土器の口部と内部の土壌について分析を行った。その結果、土器の内部土壌（試料2）ではウシクサ族や棒状珪酸体が多量に検出され、ネザサ節型やブナ科（シイ属）も比較的多く検出された。また、イネやヨシ属、ススキ属型、クスノキ科なども検出された。棒状珪酸体はおもにイネ科植物の結合組織細胞に由来しているが、イネ科以外にもカヤツリグサ科やシダ類などでも形成される。棒状珪酸体の形態についてはこれまであまり検討がなされていないことから、その給源植物の究明については今後の課題としたい。土器の口部の土壌（試料1）でもおおむね同様の分類群が検出されたが、いずれも比較的少量であり、イネやススキ属型は検出されなかった。以上の結果から、10世紀とされる土器の内部には、何らかの形でウシクサ族やネザサ節などの植物葉が入れられていたものと推定される。また、当時は周辺で稲作が行われていたと考えられ、シイ属やクスノキ科などの照葉樹林も見られたものと推定される。

（2）平安時代と見られる遺構の覆土と焼土

遺構の覆土（試料3）および焼土（試料4）では、ウシクサ族やネザサ節型、棒状珪酸体、ブナ科（シイ属）、クスノキ科などが検出されたが、いずれも比較的少量である。

以上の結果から、当時はウシクサ族やネザサ節を主体とするイネ科植生であったと考えられ、周辺ではシイ属やクスノキ科などの照葉樹林も見られたものと推定される。

参考文献

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培　植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29．

写 真 図 版

1．安養寺Ⅱ遺跡

遺跡の全景・上空から

遺跡の全景・上空から

北から

南から

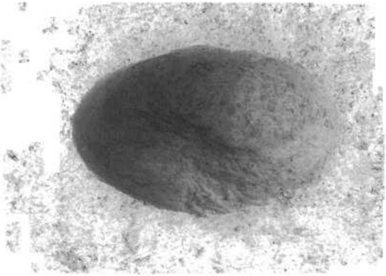
東から

西から

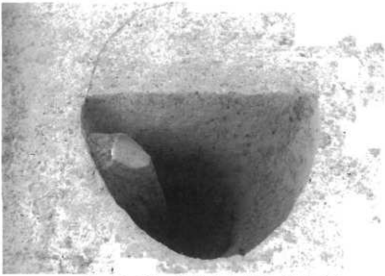
1．空 中 写 真

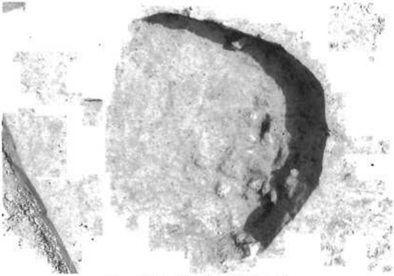
2. 東側壁面層序

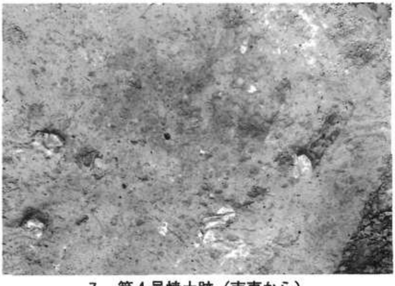
3. 西側壁面層序

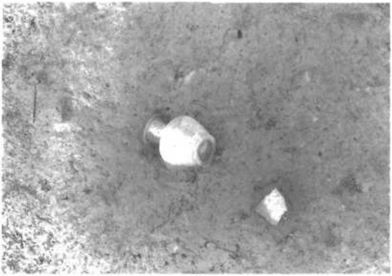


4. 第1号土坑


5．第1号土坑の遺物出土状況（南から）


6．第3号土坑（北から）

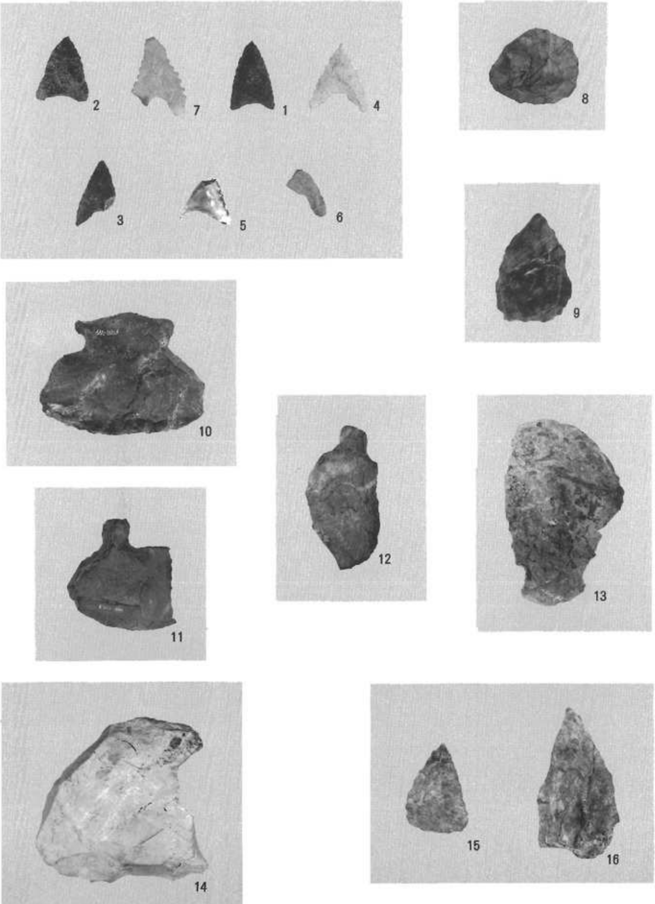

7．第4号焼土跡（南東から）



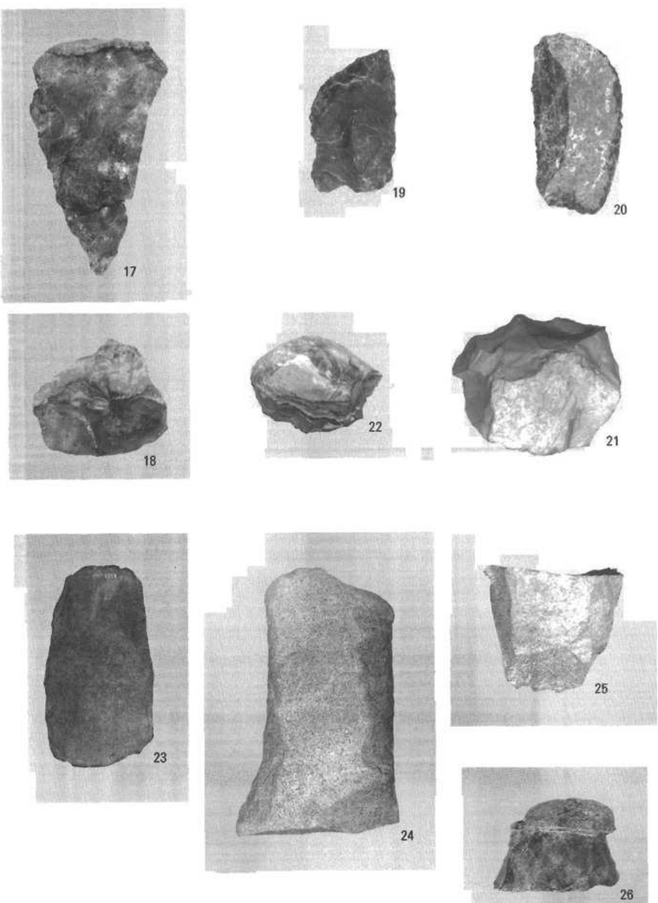
8．遺物出土状況（第25図65）

9．完掘状況（西から）

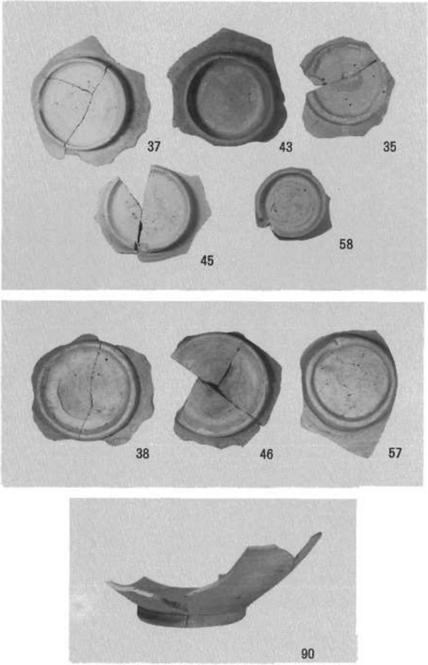
10．完掘状況（東から）



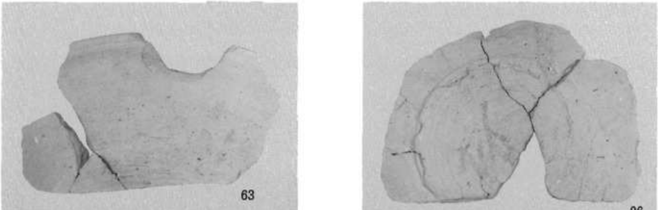
11．安養寺Ⅱ遺跡から出土した石器（1）



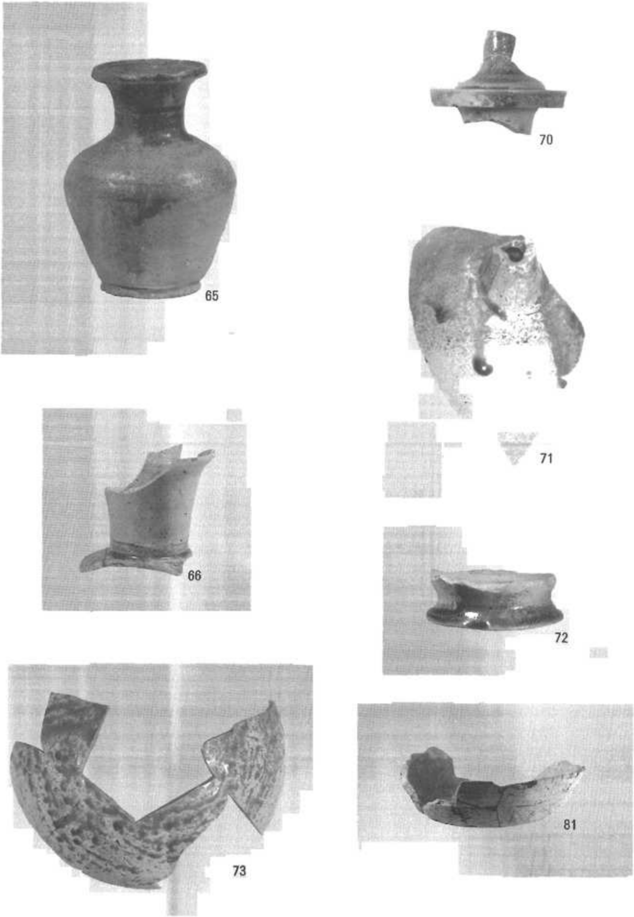
12. 安養寺Ⅱ遺跡から出土した石器（2）



13. 安養寺Ⅱ遺跡から出土した土器（1）



13. 安養寺Ⅱ遺跡から出土した土器（2）墨書土器



14. 安養寺Ⅱ遺跡から出土した土器（3）

2．安養寺Ⅲ遺跡

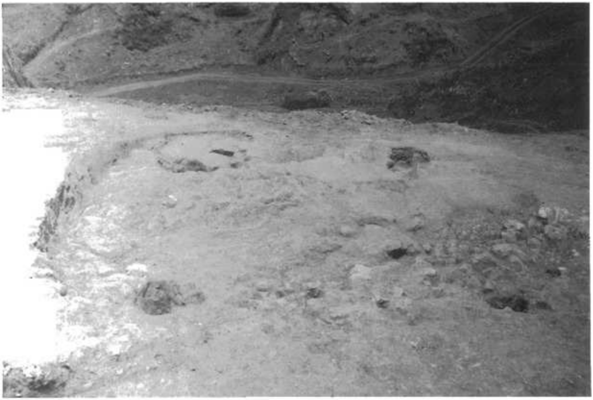
1．安養寺Ⅲ遺跡完掘状況（東から）

2．ＳＢ０１、ＳＦ０１完掘状況（西から）

3. ＳＢ０１、ＳＦ０１遺物出土状況（東から）

4. ＳＢ０１遺物出土状況

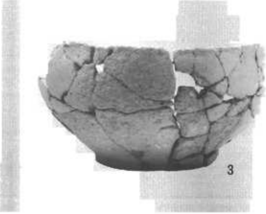
5．ＳＦ０１遺物出土状況



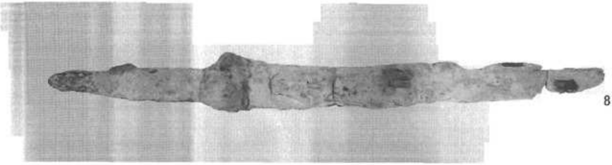
6．ＳＢ０２完掘状況（南から）

1

2



3



8

7．安養寺Ⅲ遺跡から出土した遺物

報告書抄録

ふりがな	あんようじ に・さん はっくつちょうさほうこくしょ
書名	安養寺Ⅱ・Ⅲ遺跡発掘調査報告書
副書名	水垂地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	シリーズ番号
編著者名	松本 一男（掛川市教育委員会）、小谷 亮二・田中 久美子（静岡人類史研究所）
編集機関	掛川市教育委員会
所在地	〒436 静岡県掛川市御所原9-24 TEL0537-24-7773
発行年月日	西暦1996年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	度分秒	度分秒		㎡	
あんようじに 安養寺Ⅱ いせき 遺跡	しずおかけん かけがわし 静岡県 掛川市 あんようじ 安養寺130-1他	22213	503	34° 47′ 5″	138° 3′ 27″	1995年 8月21日～ 1996年 3月31日	700	水垂地区土地改良事業に伴う事前調査
あんようじさん 安養寺Ⅲ いせき 遺跡	しずおかけん かけがわし 静岡県 掛川市 あんようじ 安養寺62-3他	22213	504	34° 47′ 30″	138° 2′ 32″	1995年 5月16日～ 1996年 3月31日	450	水垂地区土地改良事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
安養寺Ⅱ遺跡	集落跡	縄文・弥生時代 古墳時代 平安時代	土坑・焼土跡	縄文土器・弥生土器 灰釉陶器・須恵器 土師質土器・石鏃 スクレイパー・石匙 打製石斧・石核	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
安養寺Ⅲ遺跡	集落跡	弥生時代後期～ 古墳時代前期 平安時代末期	竪穴式住居跡・土壙	弥生土器・土師質土器 山茶碗・小刀	

静岡県掛川市

安養寺Ⅱ・Ⅲ遺跡発掘調査報告書

平成8年3月20日印刷
平成8年3月31日発行

編集・発行：掛川市教育委員会
〒436 掛川市水垂51番地
TEL 0537-24-7773

印刷：有限会社 文書サービス